
オモイノチカラ

ブナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイノチカラ

【NZコード】

N1004X

【作者名】

ブナ

【あらすじ】

とある不思議な力を持つ少女サリア。ある日、彼女が謎の人間たちに攫われてしまう。幼なじみであるカリクは、旅立ちを決意し、彼女を助けに町を発つ。

彼女の力に隠された秘密は何か。そして、カリクはサリアを助け出すことができるのか。

“心の力”を巡る、ファンタジー。

(以前モバゲーに挙げたものの大幅改変したものになります)

プロローグ『幼き日の記憶』（前書き）

呼んでる。俺のことを、呼んでる

プロローグ『幼き日の記憶』

小さな町の中心に、広場があつた。真ん中には噴水があり、地面上には全面に白のタイルが敷き詰められている。夕焼けの赤に染まっていた。昼間は賑わうこの場所も、親と一緒に子供たちが帰りだす時間となると、人影はまばらだった。

子供たちが帰っていく中、噴水の前に、まだ五歳に届いていない少年と少女がいた。二人も、親の迎えを待っていた。少年の方が口を開く。

「あか。サリアは“か”だよ」

しりとりをしていた。サリアと呼ばれた少女が、口元に手を当てて、考え込む。

「じゃあねわたしじゃね……」

彼女は長く黙り込んだ。しばらくしてから、隣に座る少年の方を向く。

「どう、カリク？」

少女は少年の名前を呼んだ。しりとりの解答はない。そのはずなのに、

「カラスかー。じゃあ“す”だね」

しりとりが、続いた。少年が一人で勝手に進めていくわけではない。しかし、少女はしりとりの返事をしていない。少女は、口に出さずに自分の解答を少年に伝えたのである。トリックがあったわけではない。それが彼女の『力』だつたのだ。二人共、まだその異常さに気づいていない。少年は、彼女が他の子供から避けられていることも理解していなかつた。子供たち本人の意志ではなく、その親の意志なのが。

二人の両親ももちろんその異常さを知っていた。ただし他と違つていたのは、彼らはその『力』の正体も知つていていたことだつた。

「ねえ、カリク」

「なに、サリア」

「わたし、このあいだこわいゆめをみたんだ」
少女は不安そうな顔をしてうつむいた。

「どんなゆめ?」

少年が尋ねる。彼女の顔を覗き込んだ。

「ひとりぼっちになつたゆめ。カリクといつしょにいたのに、だれかにひっぱられて、なんにもみえないまゝくらなとこりにおいてかれたの」

声が震えていた。思い出した光景が怖ろしかったのか、彼女は自分の身体を抱きしめる。

「だからね、わたし、こまもこわい。へりこじる、ひとりぼっちになつちゃいそуд」

目に、涙が溜まっていた。

「だいじょうぶ! そのときは、ぼくがサリアを助けてあげる!」

そんな彼女に対し、少年は立ち上ると、本で見たヒーローの動作を真似してから、大きな声で言い切った。

「ほんとに?」

「ほんとに! サリアがひとつとのときは、ぜったいたすけてあげる!

「じゃあ、ゆびきつしよう?」

少女が小指を立てて、少年に向かって出した。

「うん! やくそくするよ」

少年も小指を絡めて応える。

「ゆびきりげんまーうそついたら、はりせんばんの一ます。ゆびきつた!」

指を離し、子供たちは笑い合つた。それから、しりとりを再開する。

これが、カリク＝シユードとこつ少年の、一番古い記憶だった。

一章『招かねざる者たち』

学生で溢れる放課後の通りで、金髪黒目の中学生が空を飛ぶ鳥を見ていた。足を止めて、田で動きを追う。そのつち鳥は見えなくなつた。

目標を見失い、カリク＝ショードは前に向き直つた。生まれつきの金色の髪は、肩には届いていないが、前髪が目にかかっている。その間から、黒い目が覗いていた。体格はやや小柄。ただし、体つきはしつかりしていて、非力ではない。年齢は、今年で十七になる。高等学校の生徒だった。明日からは夏休みが控えている。

周りの学生が通り過ぎていく中、立ち止まつてているのは、人を待つているためだつた。ほどなくして、後ろから声をかけられる。

「カリク、何してるの？」

振り返ると、空を思わせるような青い瞳が、カリクの田に映つた。同じ年で幼なじみである、サリア＝ミコルフのものだつた。肩より長い黒髪を風になびかせている。カリクには及ばないものの、女子にしては背丈は高い。穏やかで柔らかい雰囲気を纏つていた。

目の合つたカリクは、うつむき氣味になりながら、問いかけに答える。

「ちょっと用事があるから、待つてたんだよ」

「用事つて、私に？」

首をかしげたサリアに対し、カリクは頷いた。黒髪の少女が、苦笑する。

「わざわざ帰り道の途中で待たないで、学校で言つてくれればよかったのに」

「帰り出してから思い出したんだよ。だからここで待つてただけだ少し、口調を強くる。これは嘘だつた。本当は覚えていた。むしろ、一日中頭にあつた。

「じゃあ、そういうことにしといてあげるね」

それを察したのか、サリアはもう一度笑った。

「じゃあつて……まあ、いいや。話は帰りながらするよ」

カリクは肩をすくめてから、歩き出した。サリアも横に並ぶ。カリクは、ほんの少しだけ間を開けた。

二人は家が近かつた。しかし、最近はあまり一緒に帰っていない。原因是カリクにある。難しい理由ではない。ただ、恥ずかしいからというだけのことだった。

カリクたちの住む国は、ラスター・ジ共和国という。世界に三つある大陸の一つにあり、その大陸の中では一番大きい国だった。三方が別の国と隣り合っているのだが、唯一南側は海と面しており、他の大陸との貿易も行われていた。

ラスター・ジ共和国は五つの都市を中心発展している。東のニケア、西のルクス、南のレンバー、北のミリシアはそれぞれ東西南北の大都市だった。中央に位置する首都セルゲンティスは、さらに巨大な都市である。

二人が住んでいるのは、ニケアの近くにあるキュールという町だった。

「それで、用事つて何？」

サリアが話を振った。黙り込んでいたカリクが、口を開く。

「そのまあ、明日から夏休みだろ」

「そうだね」

「その前に言つておきたい」とがあつてな。一回帰つたら、“例の

場所”に来てくれないか

「いいよ。帰つて着替えたら、すぐ行くね」

「ああ」

カリクがうなずき、また口を閉ざす。サリアが呼びかけてきた。

「カリク、色々話そうよ。最近、あんまり話してないし」

彼女はカリクを真っ直ぐに見つめてきた。口元には、穏やかな笑みを湛えている。カリクは、拒否できなかつた。目は合わせずに、頭をかきながら、返答する。

「……そうだな」

「ありがと、カリク」

お礼を言われ、彼は頭をもうひとかきした。

それから二人は、他愛のない話をしながら、家路を歩いた。

カリクとサリアの後方に、人影があった。ポロシャツにジーンズという簡単な私服を着た、二十代くらいの男である。細心の注意を払いながら、一人を付かず離れず追つっていた。誰にも聞こえないようにつぶやく。

「あれが今回の任務の目標か。本当に力なんて持つてるのか？」

視線がサリアを捉える。男の目的は、彼女にあつた。しかし、続けてカリクにも目を向ける。

「それに、カリクか。あれが、あの人の息子なわけね」

ぶつぶつ言いながら、男は尾行を続けた。

カリクとサリアの家は、すぐ近くだつた。先に彼女を家まで送つた後、カリクは急いで自宅へ帰つた。玄関のドアを勢いよく開けると、

「おお！ 帰つたか、カリク」

坊主頭の老人がいた。カリクは一瞬動きを止めてから、おもついきりドアを閉め、ノブを強く握つた。内側からガチャガチャと回されるが、必死に抵抗する。

「おい、カリク！ なんでドアを閉める…」

老人が叫び声が中から聞こえてきた。こちらは努めて冷静に返す。

「つるせえよ、ジジイ。今度は父さんに何を頼まれてきたんだ」

「誰がジジイじゃアアア！」

さらに大きな声が上がった。ドアの内にいる老人は、トルマ＝シエード。カリクの祖父であった。

「だいたい、今日は話をしにきただけじゃ！」

「父さんに頼まれたのは否定しないわけな」

テンションの落差が激しいやりとりは、しばらく続いた。

トルマは、元軍人で現役を退いてからも、数年前までは軍属で、次世代の指導をしていた。カリクの父であるニック＝シェードも軍人なのだが、指導側になる前からトルマは彼に軍人としての教育を施していた。その成果なのか、ニックは現在進行形でエリート街道を進んでいる。

そんな祖父を、カリクは苦手にしていた。理由は、父が受けた訓練を自分もさせられたからである。時たまやつてくるたびに、指導された。幼い頃は疑問も抱かずに従つていたが、成長するにつれて、嫌になつていつた。父のことは嫌いでなかつたが、彼は軍人になる気などなかつたので、祖父の指導が苦痛になつたのである。ただ、数年前にカリクは“ある問題”的存在を理解したため、拒否することはなかつた。抵抗は、多少するが。

祖父との小さい戦いは、母のマリー＝ショードの介入により、終了していた。結果として、

「まったく。目上をなんだと思つとるんじや」

カリクはトルマから小皿をもらっていた。

「まあまあ、お義父さん。それくらいにしてあげてくださいな。ほ
ら、カリクも謝った方が早いわよ」

マリーが割つて入る。栗色の短髪で、背は女性の平均より低い。
物腰は柔らかかった。

「悪かつたよ。でも、今日は訓練はなしにしてくれ。友達との約束
があるんだ」

母のフォローに乗つかり、カリクはそう訴えた。早くしないと、
サリアを待たせてしまう。

「なんじや、用事があるのか。それを早く言え。人を待たせるのは
よくないからの」

「ありがと、じいちゃん」

引き留めてたあんたには、言われたくない、と思つていたが、口
には出せなかつた。

「あら、お友達と遊びに行くの？」

マリーが首をひねる。

「まあ、そんなところだな」

カリクは曖昧に答え、約束の相手がサリアであると、言わなかつ
た。彼女ることは母と祖父もよく知つてゐるので、変にしつかれた
くなかったのである。

「そう。あんまり遅くならないようにしなさいね」

「それ、高校生の男に言つか？」

「高校生でも子供は子供だもの。男の子は男の子で、危険はあるの
よ」

カリクがつっこむも、マリーは涼しい顔で返した。肩をすくめる。

ただの男子高校生でも首をひねる言葉なばかりか、彼には普通の高
校生と違う部分がある。上の服を被せることで今は隠れているが、
脇腹に“それ”はあつた。強制的に祖父に持たされているものであ
る。といっても、母は存在を知らないので、それで反論しようとは
しなかつた。

「とにかく、着替えたらすぐに行くから、話は帰つてからにしてくれ

「分かったわい。早く行つてこ」

トルマがしつしつと手を振る。カリクは肩をすくめて、自分の部屋に向かつた。一階にあるため、階段を上がつていった。

カリクを見送つてから、トルマとマリーが話を始める。

「何か知りませんけど、よかつたんですか、先に話さなくて」

口火を切つたのはマリーだつた。トルマは肩をすくめてみせる。

「大丈夫じゃ。約束を破らせるわけにもいかん。帰つてきてから、ゆつくり話す」

「そうですか。なら、いいですけど」

トルマの返答ごと、マリーはあつせり退いた。別の話題を始める。

「そういえばのう、ニックの奴、首都から遠ざけられたそうじや」

「えつ？ どこに行かされたんですか」

寝耳に水で、マリーは目を見開いた。ニックは、トルマの息子であり、マリーの夫である。彼は長く首都軍勤務をしていたので、マリーは他に移るとは思つていなかつたのである。

「東都市の二ヶアじや。異例の若さでの少将昇進で、おまけに東軍統括じやと。我が息子ながら、恐ろしにもんじや。裏がなければ、素直に喜ぶところなんじやがな」

トルマは、かなり引っかかる言い方をした。マリーが、眉をひそめる。

「裏があるんですか

「あると見て、まず間違いない。首都から離されたのは、単にニックがいると邪魔だからじやる。だからこそ、ニックはわしをこにいしたんじや。カリクへの話も、その裏事情に関係する」とじ

やよ

彼女の問に、声を落として答える。軍を退役しているものの、上層部に食い込まんところ地位にいる息子の存在があつたので、そ

これが情報源としていた。ゆえに、かなりきな臭い情報も多く仕入れている。ニックの異動に裏があるとの予測は、そこからきていた。

「ミッドハイムめ。昔から、危うい奴だとは思つていたが

一人つぶやく。怒りと後悔とが、混じつっていた。

声が聞こえたのだろう、マリーは何か言いかけたが、ドアの開閉と階段を駆け下りてくる足の音を聞いて、口を噤んだ。

「なんで一人して、まだ玄関にいるんだよ」

カリクである。制服から私服に着替えていた。トルマたちが、未だに帰つてきたときと同じ場所にいることに対し、首をひねつている。

「ちょっとした立ち話じや。それより、早く行け。友達が待つてゐんじやる」

「言われなくとも、行くつての」

トルマと軽口を叩き合つてから、

「じゃ、行つてくる

カリクは一人の間を通り過ぎた。

「本当に早く帰るんじやぞ」

トルマに背中から声をかけられ、

「分かつてるよ」

カリクは、扉を開けながら応えた。

カリクを見送つてから、トルマがつぶやく。

「慌ただしいの。誰に似たんじやか」

「……それ、本気で分かりませんか」

マリーは苦笑いを浮かべた。彼女の反応に、トルマは首をかしげた。

カリクの言う“例の場所”とは、幼い頃サリアと一緒に遊んでいた。

た広場だった。昔は何度も来ていたが、育つにつれてあまり一緒に遊ぶことは少なくなり、今ではまったくなくなっていた。

ただ、それがサリアに対して酷いことだという自覚はあった。彼女はある特殊な“力”を持つために、カリク以外の同世代には気味悪がられて近づかれなかつたから、カリクがいなければ、独りになることがほとんどだつた。また、彼女の両親は子供への愛情が薄く、いい親とは言い難い。ゆえに、もっとそばにいるべきだつた分かつていていたのに、気恥ずかしさから避け気味になつてしまつた。彼女への用事というのは、そのことへの後悔も関係している。今更、何をしたところで埋め合わせになるとは思つていなかつたが、何もせずにいることはできなかつた。

広場に入ると、少し古びてしまつていたものの、今も中央にある噴水が綺麗に水しぶきを飛ばしていた。昼過ぎという時間帯のためか、いつもならたくさんいる子供たちの姿はない。昼ご飯か、昼寝かというところだろうと、カリクはあたりをつけた。

噴水の前には、既にサリアが立つっていた。白のインナーに桜色の薄い上着を着ていて、下は白のロングスカートだつた。遅れてしまつたと思い、走つて近づく。

「悪い、遅れた」

まず、謝った。サリアが邪氣のない笑みを浮かべる。

「謝らなくて大丈夫だよ。私も今来たところだから」

「なら、いいけど」

さほど長時間は経つていないので、カリクは信用した。

事実カリクは、サリアの到着からさほど遅れていなかつた。そうでなければ、未だに彼らをつけていた謎の男が動いていたから。直前にカリクがやつてきたので、いつたん止まり、二人から見て噴水を挟んで反対側に移動していた。

「それで、用事つて何？」

「あー、なんていうか……」

サリアに促され、カリクは切り出そつとしたが、言い淀む。頭をかいた。幼なじみの少女は、微笑みながら言葉を待っている。

その後ろで、謎の男は携帯に連絡を受けていた。

「もしもし」

『まだ目標は確保できていないのか。できるだけ早くという指示なのは、貴様も分かつてゐるだらう』

耳に入つたのは、固い口調の声だった。ただし、女性のものである。

「分かつてゐよ。でも、人がいないときでもいいんじゃないですかね。帰り道とか」

男の返事は、いかにも氣だるそうだった。敬語も、わざとである。

『“お前がそれでいいならな”』

相手の女が、意味ありげな言葉を返した。

(見透かされてるか)

男はその意味を察し、舌を巻く。さらに女が続けた。

『人払いは、ノーザンが既にしている。奴が暴走を起こさないいうちに、さつさとやることをやれ』

「へいへい」

また軽口を返そつかとも考えたものの、男は指示に従うことになった。ただし、

「でも、あと三十秒待つて。今、すごいといふだから」

すぐに動く気はなかつた。

『……勝手にしろ』

呆れ声がして、電話は切れた。男は携帯をしまい、再び少年と少女に関心を向ける。

「さて、早く本題に入らないと、邪魔しちまつぞ」

一人で、つぶやいた。

一方のカリクは、なかなか本題に入れなかつた。「えつと……」とか、「その……」を繰り返している。サリアはまったく急かすこなく、穏やかに微笑みながらこちらが話すのを待つていた。ただ、それが余計にカリクから余裕を奪つていていたりする。

(早く、切り出さないと)

気持ちは焦るのに、言葉は喉で引っかかつて出てこなかつた。そ^うしていると、水をさされた。

「サリア＝ミュルフだな？」

自分たち以外の声に二人は反応し、持ち主の方を見ると、二十代くらいに見える私服姿の男が立つていた。そこで、ようやく広場に自分たちと男以外の姿が見えなくなつていてることに気づく。

「誰だ、あんた」

カリクは素早くサリアを庇うように、彼女と男の間に入つた。睨みつける。

(突然のことも、冷静に対処しろ)
祖父からの教えが、頭によぎつた。

「へえ、冷静だな」

彼の対応の早さに、男が感嘆を漏らす。カリクは、何も言わない。「うちの部下も、これくらい冷静だと助かるんだけどな」いきなり、関係のないことを口にしてきたが、無視する。(相手の言葉に惑わされるな)

これもまた、祖父の教えだつた。

どうやら男は、脈絡のない話を振つて、カリクに動搖を誘つともりだつたようで、頭をぽりぽりとかいた。

「ああ、これも空振りか。いい教育を受けたみたいだな。さつきのは本音だけど」

「生憎、英才教育を受けてるからな」

カリクが軽口を叩く。強気な態度だつた。

「さすがに、ニックさんの息子つてだけはある」

「何……!?」

しかし、続く男の発言には、動搖を見せてしまった。瞬間、男の拳が顔目掛けて飛んでくる。

「でも、」Jリも仕事なんでな

「くつ！？」

カリクはすぐ防御のために、顔の横に腕を出した。

「ぐうつ！」

だが、拳の衝撃は予想以上だった。右手側に吹き飛ばされる。

「さあ、サリア＝ミュルフ。俺たちと一緒に来てくれ。素直に従え
ば、悪いようにはしない」

間に立っていたカリクがいなくなつたため、男はサリアに近づいた。懐から、銀色の物体を出す。

「ひつ」

サリアが小さな悲鳴を上げた。男の手にあったのは、小型のナイフだつた。それを見て、横に吹き飛ばされていたカリクは、その場で即座に自分の脇腹に隠し持つていてるものに手を伸ばした。

「サリアに近づくな」

低く、尖つた声が出た。彼の手には、黒く光る拳銃が握られていた。

「あらら、ずいぶんなもん持つてるのな。未成年の所持は認めてないはずだぜ」

「強引に持たされたんだ。捕まえるなら、家族の方だな」

「ああ、そうかい。ずいぶんとクレイジーなご家庭でお育ちのよう

で

「個人的には女の子を誘拐しようとしてる奴よりも、マシだと思つけどな」

「はつ、そりや違ひねえな

男が苦笑したところで、沈黙が訪れる。男はサリアに対してナイフを向け、彼にカリクは銃口を向けている。状況が膠着した。（間違いなく、サリアが殺されることはない。怪我をさせられるくらいはあるかもしれないが、それならナイフよりいい獲物がある。

たぶん、あくまであれは脅しのためのもんだろう）

冷静に分析をする。

（つまり）

「ああ、そうか。これ、俺が危ねーじゃん」
思考を、男の言葉が遮った。そして男は、手にもつっていたナイフをカリクに投げつけてきた。

「なっ！？」

腹部に向けて放たれた刃物を、彼は反射的に横へ避ける。銃口がぶれた。

（しまつ……）

その隙について、男はサリアにではなく、カリクに突っ込んできだ。

「実戦経験不足だ。出直してこい」

脇腹に蹴りを入れられ、続けざまに手首に強い手刀を喰らう。銃が手から滑り落ちた。最後に、裏拳を顔面にもらつた。身体が宙を回り、うつ伏せに地面へ倒れる。

「がはっ……！」

息が漏れた。さらに身体へ重みがかかる。彼の上に、男が乗つていた。ナイフは複数持つていたようで、さつきのとは別のものを首に突きつけられる。

「お前に動かれる方が厄介なんだな。それに、交渉にも有利だ」

「交渉だと……」

上から被さるように聞こえてきた声に反応する。相手の狙いに気づき、カリクは顔を歪めた。

「サリア＝ミュルフ。君が俺たちと来ることを拒むなら、こいつは殺す。君次第だ。どうする」

男の狙いは、サリアが従わざるをえない状況を作ることだった。カリクの首に刃が当たられ、冷たさが伝わる。

「カリク！」

サリアが叫んだ。彼女は、この状況で自分の身を一番に考えられ

る性格ではない。

「ダメだ、サリア！　すぐ逃げろ！」

カリクが、声高に叫んだところで、曲がつたりはしない。胸に手を当てて、彼女は男へ訴えかけた。

「あなたに従います！　だから、カリクから離れて」

「何言つてんだ、サリア！　俺なんて無視しろ！」

カリクが叫ぶ。それに対し、サリアは「ごめんね」と、微笑しただけで、彼の言うとおりにする様子はなかつた。男は満足げに微笑んで「いい子だ」とつぶやき、携帯を取り出す。何者かへ、電話をかけた。

「もしもーし。目標確保。俺は手が放せないんで、車回して」

親しげな口調だった。カリクとサリアに、電話の声は聞こえない。

「ああ、広場のまんまだ。どうせ、ノーザンも回収するんだし、ちようどいいだろ」

かすかに、電話口から相手の声が漏れ聞こえる。どうやら、女性のようだった。

「分かつてるよ。いいから、早く来てくれって。よろしくな

男はそう言つて、通話を終えた。携帯をしまう。

「さて、しばしご歓談だ。『しばらく』会えないんだから、挨拶は済ましておけよ」

それから男は、先ほどまでは一転し、重々しい口調で言った。「ごめんね、カリク。カリクを見捨てるなんて、私にはできないの」先に発言したのは、サリアだった。押さえつけられたまま、カリクは声を荒げる。

「ふざけんな！　お前がこいつに従う必要なんてない！」

感情的だったが、この言葉には根拠があつた。

(もし、本当に俺を殺す氣があるのなら、さっさと殺してサリアを連れて行つてしまえばいい。そうしないで、わざわざ交渉を持ちかけてるのは、俺を殺すと何かしらの不都合があるからだ。だから、サリアが逃げても、俺が生き残れる可能性は大いにある)

考えはしつつも、口には出さない。言つてしまつたら、男が作戦を変えるのは明白で、その中身が予想できない。なので、サリアが逃げられる今の状況を壊したくなかったのである。

「分かつてる」

唐突に、サリアが言い放つ。カリクの考えは、意味がなかつた。なぜなら、

「分かつてるけど、カリクを危険にさらしたまま私だけ逃げたりできぬ」

彼女は、すべて理解したうえで、動くことができていなかつたからである。

「お前……っ」

その意図を察し、カリクは顔を歪める。優しさがために、目の前の少女は自分を切れないのだ。

「なるほど。ますます気に入った。精々“あがけよ”」

男の声は、どこかご機嫌だつた。

そこへ、

「どんな状況だ、これは」

呆れた感じの高い声が飛び込んできた。カリクはなんとか視界の端に、声の主を捉える。

二十代くらいで、金髪をポニーテールにして頭の後ろでまとめている女性だった。分かりづらかつたが、背は高めだった。顔立ちがよく、綺麗な海色の瞳が覗いている。ただ、今はじと目になつていた。

「見てのとおりだ。車はどこにあるんだ」

「すぐそこ通りだ。それより、説明をしろ。これはなんだ」

一応、男の質問に答えてから、女は同じ問い合わせを繰り返した。

「んー、こいつを人質にしての脅迫だな」

男はかなり軽い調子だった。女はそれで状況を把握したらしく、頭を軽く抱えた。

「……まあ、いい。そこ責女、ついてこい。おとなしくしていれ

ば、悪いよにはしない」

しかし、彼女はそれ以上、状況について何も言わなかつた。サリアが抵抗なくうなづく。の方へ歩き出そうとした。その背に、カリクが叫ぶ。

「行くな、サリア！」

悲痛な呼びかけに、彼女は立ち止まつた。振り返り、声は出さず口だけを動かす。

「ごめんね」

また、謝罪だつた。前に向き直り、女を真つ直ぐに見据えた。「貴女に従います」

「いい目だ。ただ、これは許せ」

女は敬意を表しながらも、サリアの後ろに回り、銃を脇腹に押し付けた。銃口の感触がしたからか、サリアは微かに表情を歪める。「先に行く。そちらの少年は、お前がどうにかしら」

「りょーかい」

男の返事を聞いてから、女はサリアを伴い、広場を出て行つた。後に残つたのは、男一人である。

「さて、お前のことは任せちまつたわけだが、どうしたもんかね」男が楽しげに言った。対照的に、カリクは敵意を剥き出す。

「あんたが俺を離したら、すぐに潰してやる」

「おー、怖いね。こりや、簡単に離せなそうだ」

あくまで男は軽い態度を変えない。

「だから、動きを封じさせてもらうな」

その言葉の後、首の後ろに衝撃が走つて、カリクの意識は飛んだ。

「まったく。さすがに“あの人”の息子だけあるな。今から、将来有望なこつた」

広場には、倒れ伏した少年と、二十代くらいの男性の姿がある。

少年は、意識を失つていた。

「さてと、戻るか」

男を置いてきぼりに、男は仲間が乗っている車へ向かう。

車は、先ほど女が言つていたとおり、広場のすぐ近くに停められた。迷いなく、運転席へ乗り込む。後部座席でサリアを捕縛している女から声をかけられた。

「一応、労は労つておこつ。お疲れ様だ、ガヌ」

「ヒリヤどうも、シルラちゃん」

彼女に対し、ガヌ＝ロード中尉はバツクミラー越しに笑つてみせた。同じく中尉であるシルラ＝マルノフスが、眉根を寄せた。

「誰がシルラちゃんだ。ここで撃ち殺されたいのか、貴様」

「いいえ、滅相もない」

ガヌは大袈裟に両手を胸の前で動かした。シルラは深いため息をつく。

「まったく、なぜ貴様のような奴の方が今回の任務の責任者なのだ。まだ犬の方がマシな頭をしているといふのに」

「優秀だからじゃないですかね」

「よっぽど、風穴をあけてほしいらしいな」

「怒るなよ、シルラ。冗談なんだから。シワが増えるぞ」

「誰のせいだ」

シルラの冷たい視線と声を受けつつ、彼女の隣にいる少女ヘガヌは目をやつた。サリア＝ミュルフ。彼が上から聞いた話では、不可思議な力を持つているということだった。

「そういえば、『例の少年』はどうしたんだ？」

「ちょっと眠つてもらつてきた。安心しな、なんにも怪我はしてない」

最後はサリアに向けて言つた。反応に困つたのだろう、彼女は複雑な表情を浮かべただけだった。

「それを言つなら、ノーザンはどうしたんだ。さすがにあの団体が隠れられるほど、この中は広くないぞ」

今度は、ガヌからシルラに問つ。

「別行動だそうだ。この車で首都に行くのは、私たち三人というこ

とになる。本當なら、今すぐ出るべきなのだが貴様は無駄話に時間を使つてしまつてゐるわけだ」

彼女の言葉には、明らかに棘があつた。しかし、ガヌは気にしない。

「そりやー、早く行くとするか」

「……いつか鉛玉をぶち込んでやる」

彼女は毒を吐いた。ガヌはやはり氣に留めず、エンジンをかけた。アクセルを踏み込み、車が動き出す。

ガヌが再びサリアを見ると、窓の外をじつと見つめていた。儂げな表情で、一心に誰かを想つていていたようだつた。

と、

『カリク、絶対に助けに来て。きっと、きっとだよ』

突然少女の声がした。サリアのものであつたし、状況からして内容も特に不思議ではない。ただ、

『私、信じてるから』

彼女は“口を開いていない”。耳を介して聞こえたものではなかつた。

「これは……」

「……マジもんかよ」

シルラとガヌが、それぞれ驚愕を示す。サリアはしゃべつていなはずなのに、言葉が直接、心に飛び込んできたのである。

これが、彼女の“力”だつた。

“オモイノチカラ”、か

力の名称を、シルラが口にする。彼女の方に、サリアが肩を震わせ顔を向けた。目が見開かれている。

「本来は、あの少年にだけにだけ伝えようとしたのだろうが、想いが強すぎて漏れだしたようだな」

「どうして、それを知つて……」

シルラの分析に、サリアは自分の想いが漏れたことよりも、隣にいる金髪の女性がなぜ力の存在を知つてゐるのかという疑問がよぎ

つたようだつた。声に困惑と警戒が混じつてゐる。

「上の人間から聞いただけだ。正直、半信半疑だつたがな。実際に体験しては、否定のしようがない」

「まあ、 “あれ” がありなら、ありだろ
シルラの言葉に続き、ガヌが口を挟んだ。頭には、ある人物の姿が浮かんでいた。心に浮かぶイメージは、恐怖。

「あまりトップを “あれ” 呼ばわりしない方がいいぞ。聞かれて気分を悪くされても困る」

「いいだろ別に。隠しても、意味がないしな」

肩をすくめた。頭から今浮かんでいる人物を消すために、話題を変える。

「にしても、こつからまた首都まで一日か。しんどいねー」

よりによつてぼやきだつた。今現在、最も早い移動手段である車を持つてしても、首都までは時間がかかるのである。シルラが眉をひそめた。

「仕方がないだろう。歩きでないだけ、マシだと思え。それに、交代で私も運転はするんだ。今から嘆いてどうする」「そりや、 そなんんだがな」

(首都に戻つてからが、戦争だからな)
後半は、思うだけで口に出さなかつた。

雑談に興じる“軍人”一人と、さらわれた少女を乗せ、車は首都へと向かう。

サリアは人知れず、もう一度、幼なじみの少年を強く想つた。

一章『旅立つ少年』

『カリク。助けに来てくれるよね。貴方なら、きっと……』頭に、いや、心に、優しく悲しげな声が響いた。しかし、姿は見えない。幼なじみの少女が、どこにもいない。探そうとしても、まづ身体が動かせなかつた。深い暗闇の中にいながら、もがくことすらできなかつた。締め付けられるような胸の苦しさから、叫ぶ。

「サリアーツ！」

そこで夢は途切れ、カリクは地面の上で跳ね起きた。

「ああっ……？」

意識がはつきりしない中、辺りを見回す。制服姿の警察官が何人か彼のそばにいた。右手側には、噴水がある。広場だつた。

（何が……）

「き、君。大丈夫か」

警官の一人が尋ねてきた。カリクは多少どもつてから、「はい」と、簡単に返す。

そこで、記憶が次々と雪崩のような勢いで蘇つってきた。（どうか。俺は気絶させられて……）

「どうかしたのかい。怖い顔をしているが」

「いえ、別に。それより、どうして警察の人人がここにいるんですか」「何を言つてるんだ。こつちは、どうして君がいるのか不思議なくらいだよ」

警官に疑問を疑問で返され、カリクは眉をひそめた。状況を把握できていないので察してくれたのか、警官が説明を始める。

「この広場に爆弾が仕掛けられたという情報が入つたんだ。たぶん嘘だとは思うんだが、偽物の警察官が騒ぎ立てたらしくて、大騒ぎになつてね。仕方ないから様子を見に来てみたら、君が倒れていったんだ」

「爆弾……」

すぐさまカリクは、それが人払いのためだという考えに至った。サリアを捕らえるために、わざわざ広場から人を遠ざけたのである。ただ、それだと疑問も浮かぶ。

(どうして、こんな面倒なことを)

こんな目に付きやすい場所で誘拐を決行した意味が理解できなかつた。深夜を待つて、サリアの家に押し入つた方が、目立つリスクを減らせたはずなのである。それに、あの男女は知り得なかつたらうが、サリアの両親は、自分たちに危険が及ぶかもしれないのなら、簡単に娘を切り捨てるような人間だつた。

(俺の素性を知つていたのと、何か関係が?)

となると、思い当たる理由はカリクである。男の方はなぜか、カリクを知つていた。ただ、確証はない。

「いつたい、何があつたんだい?」

考えを巡らせていたところで、警官の声が入り中断させられた。正直に話しても、無駄だと判断した彼は、

「それが、僕にもよく分からなくて。いきなり後ろから殴られて気を失つたんで、あまり覚えてないんです」

ためらいなく、嘘の話を始めた。

「後ろから殴られた? 本当に。犯人の顔は覚えてないか?」

案の定、警官は食いついてきた。だが、嘘なので、詳細など答えられない。

「いえ、それがいきなりのこと覚えてないんです。ごめんなさい」と言つて、うやむやにした。騒ぎの犯人は先ほどサリアを誘拐した男たちの仲間に違ひないので、存在したのは間違いない。あとは、見ていないことにすればさほど厄介なことにはならないと踏んでいた。

「どうか。でも、とりあえず話だけは聞かせてもらえるかい?」

「かまわないですけど」

もちろん、何も与えられる情報は持っていない。解放されるまで、

さほど時間はからなかった。

警察での証言捏造を終え、カリクは日の暮れた道をひた走った。警察よりも、誘拐犯の情報を持つていてそうな人物に心当たりがあったのである。彼らは、車を持っていたが、徐々に普及してるとほいえ、キューで持っている人間はまだ少なかつた。複数行動で銃も所持しており、“サリア”を狙ってきたことからも、普通の人間ではなく、何かしらの組織の者たちであることが予想された。

ともすれば、警察よりも“彼”の方が知っている可能性が高い。いや、そもそも今日訪ねてきた原因そのものが、この件と関係しているのではないかという予測もあつた。

自宅にたどり着いたカリクは、走ってきた勢いそのままに、玄関のドアを力任せに開け、思い切り叫んだ。

「クソジジイ！…」

家全体、もしかすれば近所に届いたのではないかといふくらい、強烈な音量だつた。ただ、

「誰がクソジジイやあ！…」

負けないくらいの声が、家の中から聞こえてきた。歳を感じさせない、屈強な老人が大股歩きで奥から出てくる。その後ろから、何事かと目を丸くしてマリーが顔を覗かせている。

「いつたいお前は、祖父をなんだと思って……」

「サリアが攫われた！ 知つてることをあらかた話せ！」

説教を始めようとしたトルマを遮り、カリクは再び叫んだ。瞬間、祖父と母の顔色が変わつた。後者はおそらくサリアという名前に、前者は“それ以上”的ことに驚いたと判断する。

「知つてるんだろ、ジジイ」

目を据え、真っ直ぐに見つめる。強い怒りと一緒に、悔しさと辛さが涙となつて彼の頬を伝つた。

「カリク。それは、本当か？」

「嘘でこんなことは言わねえよ。いいから、情報を寄せせ」
剣幕は凄まじく、今にも祖父に飛びかかりそうだった。

「まさか、こんなに早いとは」

その祖父は、意味深な言葉とともに、顔を歪めた。

「やっぱり、事情を知ってるんだな」

カリクが詰め寄る。

「ああ、知つとる。今田はその話をしにきたんじゃからな。これほど早くに動きがあるとは思わなんだ」

一つ前の言葉と同じ内容を、もう一度繰り返す。トルマにとつても、想定外のようだつた。

「おそらく、サリアちゃんを攫つたのは、軍に関係する人間じゃ。もし違つたとしても、軍の息がかかっていると考えて問題ない」

「軍……」

祖父の話は、カリクの予測の中で最も悪いものだつた。サリアを連れ去つたのは、祖父がかつて在籍し父が属する軍の関係者だとうのである。

「根拠はいくつかある。まず、サリアちゃんを狙つてきたこと。“力”の存在を知るものは、世界にほとんどいないんじや。にも関わらず知つとるとなると、それだけの諜報能力があるということになる。それから、ニックの左遷じや。お前さんにはまだ話しどらんかつたが、首都から出されてニケアにやられた。おそらく、上層部に探りを入れていたからじやろう」

「父さんが、上層部に探りを?」

初めて聞く話だつた。順調に軍でエリートの階段を上がつている父が、そんなことをしているとは思つていなかつたのである。

「ああ。本当は、単純に国のために軍人として育てていたんじやが、サリアちゃんがこの町に来たことで状況が変わつた。軍の上部からきな臭さを感じ始めたんじや」

「ちょっと待つてくれ。サリアがこの町に來たつて、あいつは生ま

れたときから」「で育つたんじやないのか?」

幼ない頃からずっと一緒にいた少女についてのことだ、カリクは

問い合わせを口にした。トルマは、首を横に振る。

「いや。あの子は外から来た子じゃ。二つか三つだったときにな
初めて知る事実だつた。同時に、疑問に思い至る。

「じゃあ、サリ亞の親毛外から來たつてことなの?」

「それは違うの。今のあの子の親は、本来の親ではない。わしとニックとマリーで頼み込んで、育ててもらつたんじや。わしらの田の届く場所で、なおかつ完全に手元ではない位置と“う”じでな」「どうして、そんなこと」

「あの子の力が、それだけ希少なものだつたからぢや。わしですら、
都市伝説のようなものだと思っていたからの。だから、口も開いて
いない女の子の感情が伝わってきたのに、かなり驚いたわい」

当時を思い出しているのか、祖父は遠い目をした。すぐに、そん

な状況ではないことを思い出したようで、カリクに向き直つてくる。「とにかく、軍内部では力の存在を信じ、悪用を考える輩も少なからずおつた。だから、完全な監視下ではないものの目の届く場所においておいた訳じや」

「なるほどな。前に言つてた、サリ」「いつてこらのば、やこらの」とか

説明を聞き、カリクは理解した。彼は、サリアの“力”がいつか狙われているかもしれないというのを以前から伝えられていた。ゆえに、“サリアを護るため”という理由から、祖父の訓練に文句を言わず従事したのである。その懸念の理由は、この時点で既に、軍にあつたのだ。

「そうなるの。だが、状況は今より悪い。一ヶ月に追わせたかぎり
だと、今回の首謀者はかなりヤバいんで」

「上層部が関わってるのか」

サリアの情報はかなり少いはずであるので、彼女を知ることができたという時点では、容易に想像ができた。しかし、祖父の出した

名前は、一步上の人間のものであつた。

「上層部どころじやない。今回の首謀者は、おそらく“軍王”じゃ

「なつ……」

息をのんだ。とんでもない人物を表す称号だつたのである。

“軍王”。議会を持ち、総理大臣の席があるにも関わらず、事実上ラスティージ共和国の頂点に君臨する者の称号である。本来の階級名は元帥なのだが、国政も担つてゐるためにそう呼ばれていた。数代前からの体制なので歴史は浅いが、この国の軍事色はその数代の間にかなり濃くなつた。

「現在の“軍王”であるクラカル＝エル＝ミッードハイムは、わしが一番最初に持つた部下なんじやが、“力”的存在を信じ、かなり固執しておつた。頂点に上り詰めた結果として、専門の研究施設を作つたという情報もあるくらじや。首謀者である可能性は、かなり高い」

トルマの口調は苦々しかつた。行いそのものも気に入らないのだろうが、かつての部下を止められなかつたといつ負い田もあるようだつた。

「じゃあサリアも、その施設に？」

「ありえる。ただ、わしの知つている奴の性格のままならば、確実に手元に置いておくはずじや。どの施設かはともかく、十中八九、首都に連れて行かれたとみて間違いないじやろう」

「首都……」

カリクが囁み締めるようにつぶやく。首都セルゲンティス。軍の本部もある、強大な町である。サリアは、そこに連れて行かれた可能性が高い。考えたことは、一つだつた。

「行つてやる」

「なんじやつて？」

「首都に行くんだよ。サリアを助けるために自分が首都に行き、サリアを取り戻す。それしかなかつた。いきり立つ中、トルマが苦言を呈してくる。

「簡単に言つが、そう甘いものではないぞ。お前がいながらサリアちゃんが攫われたといつことは、相手はお前以上じや。おまけに、軍王もおる。首都に行つたところで、どうにかなるとも思えん」

「だからって、何もしないでいられるかよ。こんな手段を取るんだ。何をされるか分かつたもんじやない。それに、軍の上層部が関わってるなら、正攻法で警察とかに訴え出ても潰されちまつ。俺が自分で動くしかないだろ？」「

カリクは祖父の言い分を突つぱねた。さらに言葉を重ねる。

「なにより、理屈じゃない。俺はあいつを助けたい。いや、助けないといけないんだ。理由なんて問題じやない。じつとしてらんねえんだよ！」

心にあるのは、幼い頃に交わした約束だつた。サリアを一人にしないと、彼は言い切つたのである。根底には、彼女への特別な想いがあつた。それはとても単純な感情でありながら、強く激しい原動力として彼を突き動かしていた。

「確かに俺は、サリアを攫いに来た奴ら相手に、歯が立たなかつた。軍王にかなうとも思えない。でも、それでサリアを諦める理由にはならない。生きてるかぎりは、何があつてもあいつを諦めるわけにはいかねえんだ」

拳を握りしめた。爪が食い込むほど、強く、強く。

「だから、止めないでくれ。もし止めるなら、反抗しないといけなくなる」

目を据え、保護者一人を見た。

「止めはせんよ。さすがじやな。それでこそ、わしの孫じや」

祖父からの反論は、なかつた。肩をすくめながら、笑みを見せる。カリクからすると、意外な反応だつた。

「お前のことじやから、軽い気持ちではないじやろ。なら、わざわざ止める必要はないわい。わしが手塩をかけて育てたんじやから、自分から動いて当然じや」

「じいちゃん……」

話がまとまりかけていたところで、

「ちょっと、待ってくれないかな」

柔らかさの中に、しつかりとした芯を感じさせる女性の声が聞こえた。

「母さん？」

「二人だけで話を進めないでください。カリクは、私の息子です」と、マリーだった。いつもの穏やかな表情はなく、厳しい顔つきをしている。

「貴方たちの言っているような危険な場所に、おいでそれと行かせられません」

二人の方へ近づいてきた。カリクがトルマから指導されていたのは了解していたし、その目的とサリアの力についても知っていた。しかし、願わくば危険なことにはあってほしくないと考えていた。こちらの会話を黙つて聞き流すわけにいかなかつたのだろう。

「母さんの言葉でも、俺は従えないぞ」

間に入ってきた母親に対しても、カリクは睨みを利かせた。「性急なことを言わないの。絶対に行くなとは、言いません」

彼女も負けじと強い目つきを返してくれる。

「貴方がサリアちゃんのことをどれだけ想つてるかくらい、私はよく知つてます。だから、止めるのは残酷なのも分かる。けど、送り出すには条件があります」

「条件？」

「なんじゃ、その条件というのは」

カリクに続き、トルマも反応を示す。やはり、祖父はカリクを送り出す気だったのである。

「誰か、力のある人と一緒に首都に行くこと。例えば、お義父さんや二ツク。せめて、そのくらい強い人がいないと、私は貴方を送り出せない」

「だったら簡単じゃないか。じいちゃんも一緒に来ればいい」

カリクはすぐさま横にいる祖父へ目を向けた。しかし、その表情は固かつた。

「それは、無理じや」

絞り出すような声だった。明らかに、様子が先ほどまでと違う。「既に、上にニックが探しを入れていたことがバレておる。ここが狙われんともかぎらん。ニックとの交渉に使えるからの。だが、わしがいれば多少の抑止にはなる。だから、ここから離れるわけにはいかんのじや」

「な……」

カリクの顔から血の気が引く。他にトルマレベルの人間となると、心当たりがなかつた。父親であるニックでは、軍に属するためさらにも動くのは厳しい。本格的に、母と対立しなければならなくなつた。「なら、無理ですね。ニックもニケアに勤務地が移つたとはいえ、離れるわけにはいかないでしょうから」

マリーの口調は、冷たかつた。カリクは突っぱねる。

「だから諦めろっていうのか。だいたい、なんでじいちゃんや父さんが一緒ならいいんだよ。軍王には、どちらにしろ届かないだろ。俺一人と変わりやしない」

つまり、一人でも行かせろといつことだつた。どれだけ母に止められようとも、ここに留まる気はない。

「実戦経験に乏しい貴方を、一人送り出すよりはマシだわ。見込みもないし、具体的な策も計画もない。それじゃあ、首都にはやれなさい」

マリーも譲らない。間に立たされているトルマが、口を挟む。

「まあ、まで、マリー。こいつはまだ甘いが、わしとニックが動けないとなると、サリアちゃんを助け出しに行けるのは、現状カリクだけなんじや。なんとか、目をつぶってくれんか」

「ダメです。お義父さんの頼みでも、ここは譲れません。この子の母親として」

彼女は折れそななかつた。親の愛情を引き合ひに出されでは、

反論もじづりい。真正面から言こい合つても無駄だと判断したカリクは、

「もういい！」

話を切り、自分の部屋へ向かった。母の許可が必要だとは思えなかつた。

(明日の朝一で、家を出る)

決意は固かつた。

少年のいなくなつた玄関先で、マリーとトルマは佇んでいた。

「……どうこうつもりじゃ、マリー」

「どうもこつも、言つたとおりです」

「本当に、行かせないつもりか」

もう一度トルマからかけられた言葉に、今度は応えなかつた。

翌日。まだ、太陽がその姿をすべて見せきらない時間にカリクは、まとめた荷物を持ち玄関へ下りていつた。そこには、一人分の影があつた。

「……母さんか」

マリーだった。扉へ行くのを塞ぐように立つてゐる。彼女の前で

カリクは足を止め、鋭い目を向けた。

「……俺は、行くぞ」

堂々と言い放つ。迷いはなかつた。

「考えは、変わらないのね」

「当たり前だ。今のサリアの親は、あいつを助けようなんて思わないに決まつてゐる。学校の奴もあいつを避けてる。じいちゃんと父さんは動けない。そしたら、俺が助けるしかないだろ」

言いながら、心が締め付けられるのを感じていた。理由は違えど、自分も最近はサリアを避けていたのだ。そばにいてやるべきであつ

たのに、彼女を一人にしてしまっていたのである。後悔の念は、とても振り切れない。

だから、今度はもう間違えるわけにはいかなかつた。

「サリアを、一人するわけにはいかない」

わずかにうつむき、自然とこぼした。心の底からの思いが、そこにあつた。

「……昔ね」

マリーが、ぽつりとつぶやいた。声からして、何かを話しうそうとしていたため、カリクは黙る。ただ、また止められたら、もう無視して家を出ようとを考えていた。

「私、いじめられてたことがあるの。中学生のときかな。無視されたり、度の越したいたずらされたり、毎日苦しかった」

「母さんが？」

初めて耳にすることだつた。

「ええ。中心になつていじめてきてたのは一部だけど、他のクラスメイトは見て見ぬ振りをしてた。親は私に冷たかっだし、先生も厄介事になるのが嫌だつたみたいで黙認していたから、私は一人で泣いてたわ」

内容とは裏腹に、彼女に辛そうな様子はない。むしろ、穏やかに笑つていた。

「でも、ある子が私を救つてくれたの。それも転校してきた初日にね。驚くくらい、真っ直ぐだつた。代わりに、初日から周りを全部敵に回したんだけど、私はとっても嬉しかつた。私を救つてくれる人はいないものだとあきらめてたから」

彼女が笑つているのは、いじめられた記憶 자체は辛くとも、その先にある救われた記憶が強い輝きを持っているためだつた。陰となるはずの記憶が、光に呑まれていて。

「まあ、その転校生の子つていうのは、お父さんなのだけれどね。昔は正義感の塊みたいな人だつたの。なにしろ、知り合つたばっかりの女の子のために、わき目もふらずに駆けずり回つて、私の世界を

一変させちゃつたくらいだもの

「あの冷静な父さんが？」

カリクにとつては、信じがいことだった。母の思い出の中にいる父の姿が、描けなかつた。

「カリクには確かに意外かもね。でも、あの人は今も根っこはそういう熱い人なのよ。ただ、相手がいじめつ子から国になつたから、戦い方を変えるだけ。本当は、今すぐにでも軍王さんのところに乗り込みたがつてゐるに決まつてゐる。それが、あの人だから」

話す母は楽しげだつた。自慢しているようにも聞こえる。

「貴方はあの人そつくり。付き合い出してから、あの人はどうして私を助けてくれたのか訊いたのだけど、たぶん貴方と一緒にだもの」

「俺と？」

「『最初は可哀想と思つたから。でも、途中からはただ単純に好きだから護りたくなつたんだ』って。あなたがサリアちゃんを助けたいと思う理由とおんなじでしきう？」

「それは……」

カリクは答えるのをためらつた。肯定に等しい、ためらいだつた。「貴方もあの人も、思つたら一直線なのよね。カリク、サリアちゃんのご両親のところに何度か乗り込んだことがあるでしょう。そのことも知つてたのよ、私。止めなかつたけどね」

マリーに柔らかな微笑みを向けられ、カリクは口を開いて固まつた。彼女の言つたとおり、何回かサリアの両親のところへ乗り込み、「サリアを嫌うのは勝手だが、あいつの身に何かあつたら、許さない」と、何度も釘を刺したことがあるのだ。

「昨日はああ言つたけど、本当は止める気なんてなかつたのよね。ただ、貴方がどれだけ本気なのかを確かめたかったの。生半可な覚悟じゃ、だめだと思つたから。でも、心配なさそうね。私の制止を振り切つて、出ようとしてるんだから」

彼女はカリクの肩を掴み、目線の高さを合わせてきた。

「けど、一つだけ約束して。絶対にサリアちゃんと生きて帰つてき

なさい。サリアちゃんだけじゃだめ。あなたも帰つてくること。いい？」

彼女の願いは、その一つだった。“誰も死ないこと”。サリアを助けるために、命を投げてはいけないと言つているのだ。「分かつて。あいつを助けても、その後も俺が護ないといけないんだ。絶対に死ない」

カリクは回答に迷わなかつた。今まで避けてきてしまつた時間を、埋め合わせるために、死ぬわけにはいかないと自覚していたのである。

「いい答えだわ。きっと貴方は、地力が上の人ともたくさん戦わないといけない。絶対に勝てないような状況にもなるかもしねれない。それでも、死んじゃだめ。恥ずかしい逃げを選ぶことになつたとしても、生き残ることが大事。それに……」

一度言葉を切り、

「貴方には、強い想いの力がある。サリアちゃんのために生きようとする意思があれば、きっと生き抜けるわ」

彼女ははつきりとした力強い口調で、カリクに告げた。肩から手を離し、すつきりとした表情を見せる。

「さあ、行つてきなさい。一人で帰つてくるために」

「ああ、行つてくるよ。サリアと一緒に帰つてくるために」

母親の目を見つめ、カリクは強い想いを込めてうなずいた。必ず生きて、サリアと帰つてくる。心に、深く刻み込んだ。

母親から目をはずし、玄関へ行く。外への、大切な幼なじみの少女を助けるための旅への、扉のノブを掴む。

と、そこに男の声が飛び込んだ。

「待て、カリク」

振り返ると、そこにいたのはトルマだつた。廊下を真つ直ぐにこちらへ向かつて歩いてくる。カリクの前で立ち止まる、何か黒い物体を差し出してきた。

「こいつを持っていけ」

「これは……」

「お義父さん、それは……」

「わしが手入れしたものじゃ。お前に合わせて改造してあるから、ぴったりくると思うぞ」

一丁の、拳銃だった。驚くマリーを横目にカリクはためらいなく受け取る。鈍い輝きを放っていた。確かに、手に馴染むように思えた。

「約束を違えるなよ、カリク」

「……ああ」

祖父にもうなずいてみせたカリクは、今度こそノブを回す。開いた扉から差し込む光に包まれながら、彼は元気よく声を上げた。

「行ってきます！」

ここに、救出行は始まった。

キュールを後にしたカリクは、まず東の都市であるニケアを目指すことにした。以下問題となるのは、移動の手段がないことだつた。車は上流階級の乗り物で、鉄道はまだ首都周辺にしかない。数年後であれば、首都と東西南北の主要四都市に路線があつたかもしれないが、まだ存在していない。必然的に、馬車か徒歩しかなかつた。そんな背景があり、彼は一、三時間ほど馬車に揺られ、ニケアにたどり着いたのであつた。

東の大都市、ニケア。首都には劣るもの、東部軍の本拠地があり、大きめの建物も数多い、発展した街だつた。メインの通りは石造りで横に広く、車もそれなりに目につく。また、機械や建築に使われる部品を作る企業、ひいてはその工場が多く、“産業のニケア”という通称があつた。ちなみに他の方面の都市にも特色があり、北は“観光のミリシア”、西は“食物のルクス”そして南は“貿易のレンバー”とそれぞれ呼称されている。

街の入り口で馬車から降り、中心部の東部軍基地へ伸びる灰色の大通りを見つめてから、カリクは家から持つてきたものでは足りないであろう食糧を買い足すため、買い物へと出た。

敵の目がどこにあるか分からぬため、軍との接触は避けたかつた。だから、父親に会う気は、なかつた。

長旅向けの商品を扱う店で食糧を購入し、カリクは店先で足を止めて口元に手を当て、することを考え出した。

(さて、いつからどうするか。やっぱり、馬車しかないのか?)
なぜ悩んでいるかといえば、真っ直ぐに首都へ向かう馬車は意外に少なく、回り道をして最終的に首都へ向かうもののが多かつたから

である。時間が惜しい彼としては厄介だった。かといって他の手段は今のところない。

と、身体に軽い衝撃が伝わった。軽くよろける。

「つと……」

「おつと、悪いね」

何かと思えば、同じ年くらいの少年とぶつかったのであった。背丈はカリクよりも低く、体型は平均的なものだつた。彼は軽く頭を下げ、その場を離れようとする。

しかし、

「ちょっと待て」

カリクは少年の腕を掴み、強引に引き止めた。

「ちょっと、なんだよ」

驚いた顔を向けられたが、『「ごまかされない』。

「何か聞かない、分からぬのか？ 盗人」

言い放つと、少年は目を見開き、それから微笑んだ。

「へえ、やるなあ。でも、俺っちは捕まるわけにいかないんだよねえ」

「なんだと？」

カリクが眉をひそめたのもつかの間、少年が銀色に鈍く光る何かを右手に持ち、カリクの腕目掛けて振るつてきた。反射的に手を離す。先ほどまで腕があつた空間を切り裂いたのは、小振りのナイフだつた。

「やっぱり、反応いいね。でも、気づくだけじゃ駄目だぜ。じゃーな！」

周囲がナイフを見て騒然となつてゐる中、肩を解放された隙に少年は逃げ出した。

「ちつ、待て！」

すぐさまカリクも後を追う。さすがに、街中で銃を抜くわけにはいかないため、そうするしかなかつた。

これからのことを考えると、財布を取り返さないわけにはいかない

い。

「あんた、いい加減、しつこいぜー！」

「お前が足を止めたら、あきらめてやるよ！」

一人の少年は、街中で壯絶な追いかけっこを展開していた。一人ともなんてことのない様子だが、人混みの間を縫つてかなりの速度で走っているため、実際はどちらもとんでもないことをしている状態だつたりする。

付かず離れずを保つていたが、スリの少年はやがて街の郊外に建つ、寂れた屋敷へと逃げ込んだ。横に広く、一人の背よりも高い門の脇に空いた穴から、敷地内へと入つていく。

(廃虚か……。奴の住処か？ それとも、農か？)

迷いつつも、カリクはそれを振り切つて同じ穴を通つていく。前を行く少年は、既に屋敷の扉を開き、建物の中へと入つて行つた。

「逃がすか！」

農だとしても、追うのをやめるわけにはいかない。サリアを助けに首都へ行くには、どうしても必要なものなのだ。

堂々と正面から入り込むと、薄暗さと埃っぽい空氣に包まれた。二階建てで、前には上へつながる大きな階段があり、真ん中の踊り場から二つに分かれている。上がりきったところからは左右に廊下が伸びており、何より目立つのは一階につけられている四つ並ぶ大きな窓である。また一階も左右と斜め前の左右に他の部屋へ通じているのであろう扉があつた。

そして、

「ここまで招いたのは、あんたが初めてだよ。ただもんじゃないね！」

スリの少年は、一階へ続く階段の途中にある踊り場に立つていた。

仰々しく両手を開いている。

「そりやどうも。生憎、銳才教育を受けて育つたんだね」

昨日、サリアを誘拐した男にも言つた言葉を返した。不敵に笑つてみせる。

「へえ。奇遇だな。俺つちもおんじょうなもんだ」

すると、少年も同じような表情を浮かべた。ゆっくりと、獲物を手にする。銀色を放つそれは、ナイフだった。

「何本あるんだ、それ」

「さあ。とりあえず、たつくさんとだけ言つとくよ」

「ああ、そういう認識にしておく。まあ、いつも武器を使わせてもらひけどな」

軽い調子の少年に、肩をすくめてみせてから、カリクも銃を抜いた。余裕の表情を崩さなかつた少年が、わずかに頬を引きつらせる。「えーと、うちの国つて、未成年が銃持つてよかつたでしたつけ「そんなもん、決まつてるだろ」

カリクは銃口を上へと向けた。

「もちろん、違反だ。でも、そつちもスリだから、犯罪者なのはおあいこだろ」

ためらいなく、引き金を引いた。甲高い銃声が響く。狙いは、少年の足。

「いつた！」

見事に当たつたが、弾は足の皮にも届くことなく、乾いた鉄の音を上げさせただけだつた。

「……足にまでナイフを隠し持つてんのかよ」

「言つたるー、たつくさん持つてゐつて。それより、いつたいんだけど。ヒリヒリする」

「それで済んで良かつたな。本当なら、穴が空いてたんだ。ナイフに感謝するんだな」

言葉を交わしつつ、次に狙う場所を考える。彼は足を撃つことで、命には別状ないようにしようとしていたのだが、無理そうだった。

かといつて、他にどこを狙えばいいかも分からない。

(そもそも、あいつが逃げない理由が分からぬ。街中でなら、騒

ぎを起こせば乗じて逃げられたかもしれないのに)

「どうしたんだよ。こないなら、こっちからいへぜ」

照準を合わせかねていると、少年が高らかに宣言した。どこからともなく手品のように複数のナイフを出し、指の間に挟んで構える。

「おひひー。」

その中の一本を、的確にカリク目掛けて飛ばしてきた。階段下にいたカリクは、横にステップを踏んで避ける。

が、

「あめえ！」

「なつ！？」

そこにもナイフが飛んできた。脇腹を捉えてくる。

「くそつ！」

仕方なく、銃で対処する。銀の物体を弾いた。床にちゅうど刃先が刺さる。

「へえー。やっぱりやるねー。」

「お前がそれを言つかよ。ただのスリにしては、レベルが高すぎるぞ」

楽しそうに見下ろしてくる少年に、カリクは吐き捨てるような口調を向けた。

(俺が避ける方向を読んでたんだろうな。まさか避けたところにも放つていいとは思わなかつた)

実際のところ、相対している少年は、あまりに手慣れすぎていた。銃を持った相手にそれほど尻込みもしていないのも、ただの孤児とは思えない。何かしらの訓練を受けたことがあると考えるのが自然だった。

「でも、いつまで保つかな？　どんどん行くぞ！」

第一陣が放たれる。たつた一本だが、避けた先にもくるのは予想がついた。

「ちい！」

手の内を理解しつつも、まずは“見せ”であるナイフを左に避ける。次に来るであろう攻撃を予測し、横へ銃口を向けた。しかし、予想外の光景が、彼の目に飛び込む。

「三本！？」

向かってくるナイフが三本に増えている。縦に列をなすように並んでいる。とても、拳銃一丁で対応しきれない。とりあえず、一番上にある肩口を狙つたものを撃ち落とす。他二つはどうしようもなく、身体に受けた。

「ぐうつ……」

呻き声が漏れる。脇腹は隠して巻いている銃のホルスターで、ダメージを軽減させたが、右足の膝辺りに深く刺さった。ズボンに血が滲む。

「悪いなー。俺っちはてば、ちょっと訳ありな人間だから、ここまでしつかり顔を覚えられると、厳しいんだ。だから、不本意だけどあんたには死んでもらわないと困るわけ」

カリクヘダメージを『えたのを見て取ったからか、少年が口を動かす。どうやら、姿を覚えられては不都合な事情があるようだつた。

「そうかよ。そりやまた、運がないな」

痛みを堪えながら、脇腹のナイフを引き抜く。足のものは、出血が酷くなるのが目に見えていたので、刺さったままにせざるをえなかつた。

(どうする。獲物がナイフだから、あつちは確實にトドメが指せるくらいにこつちが動けなるまで、この戦法でいくつもりだらうしな)少年の方を睨みながら、カリクは頭を回転させる。こんなところで死ぬわけにはいかない。かといって、財布を諦めるわけにもいかなかつた。それに、目の前の少年はただ者ではない。場合によつては、戦力にできそつだつた。

(このまま、同じことを繰り返してもジリ貧になるだけだ。武器切れを待つわけにもいかない)

「言つておくけど、逃げられはしないぜ。背中を見せたら、そこであんたは終わりだ」

手元でナイフを弄びながら、少年は微笑を浮かべる。元から引く氣のないカリクには、ちつとも役に立たない警告だった。

(仕方ないな……)

カリクは、腹を決めた。肩から提げたカバンを、左手で掘む。

「さあ、またいくぜ！」

三度ナイフが飛ばされる。今度は、避けずに自分目掛けてきたのを真っ先に撃ち落とした。

「甘いね。あんたも、その程度か？」

少年が冷たい声を出す。奥にもう何本か別のナイフがあつたのである。先ほどと同じく、縦に三本並んでいる。さらには、左右にも一本ずつ放たれていた。

(きた！)

しかし、“計算通り”だつた。まず正面の一一番上を飛ぶナイフを右手に持つ銃で撃ち落とす。残るは一本。

「よつ！」

声とともに、カリクは前へ飛び、身体の前にカバンを回した。下のナイフは飛び越し、彼の腹部を捉えていたナイフはカバンに刺さる。

「なつ！？」

カリクが銃だつたからだろう、突つ込んでくるとは思つていなかつたようで、少年は目を見開いて驚きを示した。ほんの僅かな間ながら、動きが止まる。それでも、カリクには充分だつた。階段を一気に駆け上がる。

少年が我に返り、迫るカリクへ攻撃を仕掛ける。両手から一気に四本を横に列を作つて放つてきだが、

「甘い。狙つてる軌道が見えすぎだ」

動搖している相手の攻撃を見切るのは、造作もなかつた。真ん中一本の間に身体を通す。そのままの勢いで、間合いを詰めた。

「くそつー。」

少年が連續で何本か放ってきたが、カリクは神がかつたスピードで、自分の進むルートのものをすべて銃弾で床に落とした。それも、段を上りながらである。

少年の手元には、ナイフがなかつた。後退しつつ、武器を取りつとしていたが、

「ずいぶんと余裕なさそうだな」

カリクはその隙を逃さない。最後の一詰めをする。「終わりだ」

そして彼は、引き金を引いた。ただし狙いは、少年の身体ではない。銃口は、相手の靴を捉えていた。

「おわっ！？」

けたたましい金属音が響き渡る。“刃物を仕込んだ靴”で蹴りを入れようと、足を上げていた少年は、銃弾を受けた衝撃で、背中から床に倒れた。容赦なくカリクは敵の腹を踏みつけ、銃を向ける。“チエックメイトだ。全身にナイフを仕込んでお前なら、靴にも何かあると思つてたぜ。残念だつたな”

少年を見下ろしながら、カリクは表情を崩さずに告げた。全身に武器が隠されているのなら、追い詰めたとき一番注意が疎かになりやすい足の方にあると考へたのである。予想通りだつた。

「ぐつふ。や、やっぱり、ただもんじやないな、あんた」

足蹴にされながらも、少年は笑つてみせた。抵抗しないことを示すため、手を上げている。笑みは硬い。

「とりあえず、まず財布の場所を言え。話はそれからだ」

「わ、分かつたよ。ケツのポケットだから、このままじや取れな

いぜ

「そつかよ。じゃあ、やっぱり順番を変える

「いつ？」

少年の頬が、さらに引きつる。

「どうしたよ。足をどかした瞬間に何かするつもりだつたか。それ

ともポケットに何か仕掛けでもしてたか

「い、いやいや。滅相もない」

(絶対になんかあつたな……)

まだ油断できない相手であることを再認識する。ただ、だからこそしたい話があつた。

「俺は今、首都に向かつてゐる。軍の上層部と戦わないといけない。お前も一緒に戦ってくれ」

「はあ？ いきなりなに言つてんだ」

少年が素つ頓狂な声を上げた。無視して、続ける。

「お前も訳ありなんだろ。警察の世話をになりたくないければ、協力してくれ。安物でよければ、食事もこっちは持つてやる」とても協力を頼んでいる光景ではなかつた。少年も、口を空けて固まつている。

「早く答える、こそ泥」

眼下にある腹を、さらに強く踏みつけた。少年が呻きを漏らす。たまらず、うなずいた。

「わ、分かった分かった。でも、一個だけ条件」

「聞くだけ聞いてやる」

「なんで軍のお偉いさん方を敵に回すことになつたのかぐらいは、教えてくれない？」

真つ当な質問だった。カリクはしばらく考えて、

「それくらいならいいだろ。事情は知つてもらつておいた方がいいしな」

そう言つてから、今の自分の状況について話し始めた。

「“オモイノチカラ”……」

カリクが話しあつたところで、少年が真つ先に口にしたのは、その单語だった。

「ああ。軍の奴はその力を狙つて、サリアを誘拐した。俺からしたら、なんの得があるのか分からぬが、間違いくろくでもないことに決まってる」

たった一点を除いて、普通の少女であるサリアが、どうして陰謀に巻き込まれたのかということと、彼女を連れて行かせてしまった自分の不甲斐なさへの怒りで、荒っぽく吐き捨てた。

一方の少年はといえば、どこか上の空だった。手は挙げたままだが、カリクに意識が向いていなかつた。

「で、協力はするのか？」

話しかけると同時に軽く足へ力を入れ、強引に気を戻させる。少年は、やや顔を歪めてから応じてきた。

「にわかには、あんたの彼女が持つてるっていう力が信じられないけど、軍を敵にしてるつていうなら、俺っちは一緒だな。いいぜ、協力しても。タダでご飯も食べさせてくれるんだろ？」

今度は、ニヤリと笑つてみせる。口々口々と表情が変わる少年を見て、今更になって不思議な奴だとカリクは思つた。

「ああ。それは約束してやる。ただし、財布は返せよ

「へいへい」

銃口を少年から離す。妙な動きをすればすぐに撃てるように、警戒は怠らないがなんとなくもう攻撃はされない気がした。手を挙げる必要がなくなつた少年が、お尻のポケットからカリクの財布を素直に取り出す。

「ほら、財布」

カリクに投げてきた。氣を引かせて攻撃かとも思い、警戒したが、何もしてこなかつた。

「中身だけないとかいうことはないよな

銃を持っていない左手で、受け取る。少年は右手を自身の胸の前で振つた。

「ないない

「そうか」

「あ、でもやっぱ確認はするんだ」

カリクは少年のツツ「ミミ」を無視して、中身を確認する。どうやら、

何も盗られていなかった。

「しつかし、本当に強いよなあんた。いつたいどんな教育受けてきたんだよ」

「その言葉は、そつくりそのまま、お前に返してやる。ただの家なし子にしては、戦い慣れしそうだ」

「それもそうだな。まあ、ちょっと特殊な育ちをしたからね、俺つちは」

「特殊な育ち方、な。俺も特殊といえば、特殊か」

それどころか、はつきり普通ではない。しかし、少年はそんな力

リク以上に、何かがありそうな雰囲気であった。

「そういえば、あんた名前は？」

「カリクだ。お前は？」

「俺つちはレイン。よろしく頼むぜ、カリク。主に食費を」

「安物でよければな」

「問題なしだ。食えるってだけでも万々歳だし」

互いの紹介をし、無表情に近いカリクに対し、スリの少年こと

レインは笑顔を見せた。

「けど、驚いたねー。まさか、自分の財布をスッた奴に協力を頼んでくるとは」

「相手がデカいからな。なんのしがらみのなさそくな、お前みたいな奴の方が味方として都合がいい。それに……」

銃を服の中に隠れているホルスターへしまづ。言葉を切ったので、レインが続きを促してくる。

「それに？」

「お前の戦い方は、ほとんど我流だが、根底に軍人の基礎を思わせるのを感じた。だから、何か因縁もあるかと思ってな。そつちのしがらみなら、あつても困らない」

「……なるほどね」

彼はどこか意味ありげな反応だつた。おそらく、ビニがしきは合つてゐるのだろうと、カリクは踏む。

「じゃあ、行くぞ。これから、首都に行く手段を考えないと。誰かさんのせいで、余計な時間をくつたからな」

とはいへ、協力してもらえるなりレインの事情に興味はなかつた。さつさと廃屋を後にしようとする。

「えつ、ちょつ、もつと訊くことないの？」

「ない。それより時間が惜しいんだ。お前の詳細はどうでもいい」

「……さいで」

一度、レインはカリクを呼び止めてきたが、肩をすくめただけだつた。

「でも、荷物を用意する時間はくれよー。さすがに準備くらいはさせてくれるだろ？」

「……逃げるなよ？」

「逃げないって。あんたの話、“面白かつた”しな」
話はともかくとして、彼は旅の準備をしに、一階の奥へと走つていつた。カリクは、踊り場で待つことにした。

五分ほどで、レインは戻ってきた。小さなリュックを背負つている。

「何入つてるんだ、それ」

「んー、だいたいナイフ」

「……そうか」

訊いておいていながらとこりではあるが、彼は軽く流した。
頭の中で、荷物確認は絶対に避けると、注意事項を書き入れる。元々、銃のせいでの身体検査がアウトなのだが、比較的行われやすい手荷物の方もまずいとなると、色々と気を使わないといけなそうだつた。

「んじや行こうぜー。ああ、俺たちの加入祝いでもいいぞ」

「それはない」

「即答！？」

レインの軽口を一刀両断し、カリクは廃屋を出た。謎の少年を、協力者に引き込んで。

それから一人は、まず古着屋へ行き、レインの服装を安物で整えた。家なし子にしてはまだ綺麗な身なりだつたが、やはり普通よりは汚れていたので、違和感を消すにはそれが一番手つ取り早かつたのである。結局、上は赤と黄色の派手なチエック柄のワイシャツ、下は膝や腰の部分に余裕のある迷彩柄の長ズボンという出で立ちになつた。選んだのはレイン本人である。できるだけ目立たたくないカリクは反対したのだが、

「片方が目立つてれば、もう片方はあんまり覚えられないぜー。」

という、本当かどうか際どい意見を盾に押し通された。

店を出て、街の中央付近にある役所へ向かう。キュールに出入りする馬車の情報を扱っている、交通局というところに用があつた。その道すがら、カリクはレインの格好に対する周りの反応を見ていたのだが、意外にもあまり注意を引いていなかつた。それどころか、上下がピンクと淡い青とか、たまにもつとんでもない格好の人気がいたりで、あまりレインが派手に思えなくなつてくるほどだつた。

「今は、派手なのが主流なのか？」

「主流ではないと思ひや。でも、前より増えてる。くそー、なんか負けた気分だ」

勝つていいことがあるのかとカリクは疑問に思つたが、伝えなかつた。

そうこうしているうちに、役所にたどり着いた。一階建てながら、縦横の面積が大きい建物で、くすんだ白の外壁のあちこちに窓がある。だが、隣にある黒一色の建物の存在感に圧倒されていた。四階建ての建物に、演習場まで敷地内にある東部軍基地と並んでいたの

である。

「レイン、交通局の場所は分かるか？」

「知らねー。だいたい、俺っちが役所に用があるわけないんだから、分かんないに決まってるじやん」

「……どつかに案内図くらいはあるだろ」

ただ、今は基地に用はない。とりあえず、役所の中へと入った。中は、混んでいるわけでもなく、空いているわけでもなく、そこそこに人がいた。さすがに、レインの姿が浮く。隣を歩く彼へ、「やっぱり、買い替えないか、それ」

そんな提案を試みるが、

「えー？ パスで」

あつさり断られ、カリクは肩をすくめた。

「おつ、ほらあつたぜ、カリク」

カリクに構わず、レインは楽しげに右前を指差した。その先には、“運行情報”と書かれた掲示板があり、近日中の馬車の運行情報が記された紙が所狭しと張られている。

「なんだ、首都行きはたくさんあるじやん。よりどりみどりだぜ？ 何が楽しいのか、レインは二口二口していた。カリクは自分の額を押さえる。

「そりや、首都に行くのはたくさんあるだろ？ よ。問題なのは、遠回りなのがほとんどだつてことだ」

「遠回り？ おつ、本當だ。レンバー経由とかもあんのか。すげーな」

もう一度掲示板を確認したレインが、驚きを示した。それから、カリクの方を向いてくる。

「遠回りじや、ダメなのか

「できれば避けたい。一刻も早く行きたいんだ」

首を横に振り、真っ直ぐにレインへ目を合わせる。すると、眼前の派手な少年はニヤリとした。

「じゃあ、俺っちにいい案があんぜー」

瞬時に、カリクの頭の中で警報が鳴った。

「ここだぜ、カリク君」

「ああ、そう……」

一人がいるのは、ニケアの郊外だった。眼前には、多くの産業廃棄物が山となつていて、産業で発展している街の、裏の姿だった。オイルとサビの混じつた悪臭が漂つている。

レインが胸を張つて解説を始める。

「たまーに、失敗作の車が、解体されて必要な部品だけ抜き取られた状態で放棄されるんだ。で、車からは抜き取られたパーツも、別のときにまだ使えるのに放り出されてたりするんだ。実際、前に見たし」

ようするに、車を見つけようといつことだった。カリクは難色を示したが、もし馬車を選ぶなら一日の猶予があつたため、あまり期待を持たずを探しに来た次第である。

「見たことがある、か。仮に本当に車とそれに必要な部品があつたとしても、動かないと意味ないぞ」

「大丈夫大丈夫！ そこは俺っちにまつかせなさい」

どこから来るもののかさつぱりだが、レインはやけに自信満々だった。逆に、カリクは不安がじわじわと増していく。

「まあ、とにかくまずは探すとしようぜ。話はそれからだ」

「はあ……。そうたな。とにかく、探してみるか」

ため息をつきつつも、カリクは同意した。一人で、ゴミ山の散策を始める。

「で、ずいぶんと俺たちは神様に愛されてるらしいな」

数十分後、カリクとレインの前には、廃棄された試作車があった。白いボディの小型車で、ボンネットは全開にされている。レイン曰わく、部品がいくつか抜かれているものの、足りないものもつまうこと調達できたとのことだった。

「いやー、まさかこんなにうまく行くとはなー」

レインにとつても予想外だつたらしい。ご機嫌に声を上げた。

「で、組み立てはどうすんだ？ 僕は車の作り方なんて分からぬぞ」

そんな彼へ水を差すように、カリクは尋ねた。しかし、レインは元気なままで、こともなげに答えを言つ。

「もち、俺っちはやるぜ。あと、運転もまつかせなさい！」

「仕方ない。馬車にするか……」

「待つた待つた！ 僕っちのこと信用してなさすぎだらー！ 共闘するんだから、仲良くなよ！」

とは言われても、そもそもは財布をスッてきただ相手である。戦力としては信用できても、他の部分では無条件で信頼はできない。

「むむむ。見てろよ。俺っちの技術はすごいんだからな！」

カリクの内心が伝わったのか、レインは覚悟しろと言わんばかりに、左手を腰に当て、右手で指を指してきた。

「期待しないで待つてやる。馬車が出る明日の晩まではな

「うつしゃあ！ 目にもの見せてやるからなー！」

冷たい反応にもめげずに、彼は両手を上げて雄叫びを発した。それを見て、カリクは肩をすくめる。

「まあ、せいぜい頑張れ。俺は場所を確保して、眠らせてもいい

「おう！ つて、ええつー？ そこ、そばで待つてくれるとかじやないのー？」

「誰が待つか。一人でやつてろ」

「つ、冷てえ……」

その後も文句を垂れ続けるレインを完全に無視し、寝床を探しに

廃棄物の山を離れた。

翌朝、日が出掛かっているぐらいい、カリクはレインの様子を見に行つた。昨日別れた場所に着くと、周囲に転がっていた部品が消えていて、ボンネットの閉められた車のそばで、昨日出合つた少年がタイヤ辺りに背を預けて眠つていた。

「これは……」

半信半疑ながら、車へ近づく。見ただけでは動くかどうかが分からなかつたので、

「起きる

「ぶふつ！？」

傍らで田を閉じてゐるレインの頬を叩く。足で蹴ろつかとも思つたのだが、さすがにやめておいた。

「車の修理はできたのか？」

「うー……。もう少し、愛情ある起こしがよかつたぜ……」

「叶わない願いを口にする暇があつたら、さつさと訊いてること

答える」

なで声を簡単に流し、カリクは先を促した。不満げに口を尖らせながら、レインが答える。

「できてるよ。もう試運転もしたし

「……本当か？」

「本当だよ！ 見てろよー！」

寝起きとは思えないほどに、元気のいい反応が返つてきた。そのままの勢いで、彼は車に乗り込む。カリクは少し車から離れた。

そして、窓越しに見えている少年がハンドルを掴み、足元を一度見た。

「へえ……」

ほどのなく、タイヤがゆっくりと転がりだした。車が、動いていた。少しだけ進んでもすぐに止まり、レインが鼻息荒く降りてくる。

「どうよ、カリク君！ しつかり直してみせたぜ！」

「そうだな。文句なしだ」

素直に彼の手腕を認めた。ますます何者なのか怪しんでもおかしくないとこりだが、あくまでカリクは気にとめない。いくつか、車に関する質問をする。

「で、運転もできるんだよな」

「もちー！ でなきゃ、こんな提案しないって」

「じゃあ、燃料はどうするんだ？」

「そりやお前、決まってるだろ。俺たちちが買えるわけないんだから、方々からちょっと拝借すんのさ」

一つ目への答えに、カリクはため息をついた。正直、どうせそんなことだらうという予想は持っていたのだが、実際にうなづかれるど、頭を悩まさるをえなかつた。

「まあ、他に方法がないから、仕方ないことではあるんだけどな手を額に当てながら、つぶやくように言ひ。車の免許を取れるのが十八歳から、それも今は上流階級の人間でないとそうそう取得者がいないので。バカ正直にガソリンを買いに行つたところで、売つてもらえるわけがなかつた。

「なーに。俺たちちがちこつと盗んだくらいで、不利益になつたりしないって。捕まらなきやいいだけだし」

さもたいしたことではないかのようないい草だつたが、時間の惜しいカリクとしては一度たりとも捕まるわけにはいかないため、かなり重大なことである。少しづつ遅くなるだけでも、サリアの安否は確実に怪しくなつていいくのだ。また、なにより捕まらなければいいだけというのが、そもそも一番大変な点なのである。

とはいへ、同じく時間を考慮すると、ガソリンを盗難するリスクを加えてなお、車で移動した方が効率的だつた。腹を決める。

「仕方ないな。俺も盗人になってやる。お前も、捕まるなよ」

犯罪を犯さないことよりも、サリアを助けられるかどうかの方が、

彼には重要だつた。

「合点！」

レインが明るく返す。顔には満面の笑みがあった。
こうして二人は、薄汚れた白の小型車に乗り、ニケアを後にした。
首都へとたどり着くために。

四章『囚われの少女』

時は、カリクとレインがニケアを出て数時間経つたくらいであった。場所は移つて首都セルゲンティス。サリアは、茶髪の大柄な男と金髪のスラッシュした体型の女、二人の軍人に連れられて、街への入り口へとたどり着いていた。ひたすらに高く白い壁が続いて、中には監獄があると言われても納得してしまいそうだった。その中に、街へと続く一枚並びの門はあつた。

今、車は止められている。セルゲンティスは、さながら国境のごとく、入る者への厳しい審査があつた。軍人であつても免れることはできない。

「これはこれは、ガヌ中尉。ご苦労様です」

サリアたちの乗る車を止めた入都管理局の人間が、降り出たガヌに敬礼をする。シルラは、サリアの隣に座つたままだつた。

「まさか、逢い引き中だつたのですか？」

「逢いび……っ！」

その管理局の男は、車の扉越しにシルラの姿を見つけたらしく、ニヤッとした。サリアの隣に座つたままの彼女が顔を引きつらせる。一方、車外で直接言葉を受けたガヌはといふと、「いやー、そうだったらよかつたんだけど、残念ながら任務だ。それも超特殊オーダー。ほれ」

軽い調子で流し、一枚の紙を示した。サリアからだと、よく見えない。

「これは、軍王様の勅命書じゃないですか。どんな任務なんですか？」

管理局の男は、やや声色を高くした。どうやら、紙は勅命書のようだつた。

「バーク。こんな紙がもらえるくらいだ。極秘に決まつてるだろ。いいから、早く入都許可出せ。車の中にはもう一人も任務がらみ

だから確認は不要だ」

「了解しました。今、門を開けますから、車内で待っていてください」

ガヌの催促を受け、管理局の男は門の横に引っ付いている守衛室へと小走りで戻つていった。やがて、門が開く。開き切つたのを確認してから、ガヌが運転席へ戻ってきた。

「さ、行こうぜ、シルラ」

「……ああ、そうだな。行くとしよう」

サリアから見たかぎり、シルラはもう平時の調子を取り戻したようには思えたが、

「あつれー？ シルラちゃん、もしかして逢い引き発言、まだ気にしている？」

「なっ！ そんなわけないだろ？ この阿呆が！」

からかいに対して、声を高くしたことから察するに、それは勘違いのようだった。

（仲いいなー）

攫われたにしては、かなり危機感に欠けた感想が、サリアの頭には浮かんだ。

当初こそ、サリアは当然ながら自分を強引にカリクから引き離した軍人一人を警戒していた。しかし、どうにもガヌとシルラを、完全に敵と位置付けることができなかつた。理由は、大きく分けて二つある。

一つ目は、二人がサリアをいたわつてくることだつた。任務上そうしなければならないのか、それとも単純に一人の人柄なのか、首都へと向かつていた一日間、ことある事に気を使われたのである。「何か食べたいものある？」とか、「しんどくない？」とか、「もしあの男に変なことをされたら、すぐに言え。容赦なく撃ち殺す」

などと言われたのだ。

「一つ目は、彼らの会話だつた。一例を挙げると、

「なあ、シルラー。首都まで、あとどんくらいだー？」

「それはさつき話題にしたばかりだろうが。あと一日は絶対にかかると、何度も言つてゐる」

「遠いなー。なんかこう、ワープとかできない？」

「そんな便利な能力があれば、とつくて使つてゐる。貴様は我慢が足らぬすぎだ」

「えー？ すぐに銃口を向けてくるどつかの凶暴女よりはマシだろ」「さて、誰のこと言つているのかさっぱりだ」

「いや、現在進行中で俺に銃口向けてる方がいらっしゃるじゃないですか。やめよづぜー。今はお前が運転なんだから、ちゃんと前見よづつて」

「……貴様から注意を受けようとは、私も墮ちたものだな」

「こんな感じだった。サリアがいるにも関わらず、二人はかなりリラックスした様子で、コミカルな会話を幾度も交わしていたのである。そこから感じる彼らの人柄の印象がよかつたので、一つ目の訳と合わせ、どうしても敵視できなかつた。

入都の門をくぐり、セルゲンティスへと入る。中で一番に目に入ったのは、中央に位置する本部基地だつた。大通りの先に位置し、圧倒的な威圧感と存在感を放つ、黒の建物だつた。何階建てかは、遠くて分からぬ。

街並みに注意を移すと、「ちらもす」かつた。入り口付近こそ、ニケアとさほど変わりない風景だつたが、大通りを進むにつれて、建物の大きさが増していった。おまけに、かなり煌びやかである。ただし、どれだけ華やかだろうと、この街を囲う高い壁と併せて見てしまうと、違和感が拭えない。逆に、無機質か莊厳な感じの建物

は、とても自然に溶け込んでいる。

「相変わらず、なーんかちぐはぐした街だよなあ」

「そうだな。私としては、ジャラジャラ飾つたものがなければ、もう少しマシな気分になるのだがな」

「あー、まあシルラさんはお堅いですかねー。でも、あの壁は嫌だと思わない?」

「あれは仕方ないだろう。何十年もかけて造った、我が国の絶対的な防御壁だ。防衛という観点から見て、あれをなくすわけにはいかん。好きか嫌いかと問われれば、後者だがな」

おそらくここに住まいを持つ二人でも、この街の景観には否定的なようだった。

そんな街の中を、三人が乗った車は進んでいく。

やがて、遠くに見えていた黒の建物の真下へとたどり着いた。首都軍の基地、すなわちこの国の中核へと。

「あー、憂鬱だな。あの人とまた会うのか」

「文句を言うな。特殊任務なのだから、当然だ。それに、閣下を慕っている人間は多い。あまり滅多な口をきかない方がいいぞ」

「分かつてるよ。だから、今のうちに言つてるんだ」

基地の門でまた勅命書を見せ、建物の横にある駐車場を目指した。サリアは窓から外を覗いてみたが、左側にはひたすら黒壁の建物、右側には灰色の壁が続くだけだった。しばらくしてから左折したところで、ようやく前に軍の車両が所狭しと並べられている空間が見えた。奥には演習場の類いと思しきものがある。

駐車場にガヌは車を止めた。一番始めに降りると、後方のドアを開け、

「どうぞ、お二人

執事のように恭しく頭を下げた。気障っぽい動作だった。

「……サリア。貴女を今から軍王のところへ連れて行く。申し訳ないが、身体検査を受けた後、目隠しをしてもらうことになる」

そちらを無視し、シルラはサリアにそう説明をした。

「……別にかまいません」

サリアは素直に従う。ここで抗う意味がないし、一人をあまり困らせたいとも思わなかつた。

「ありがとう」

了解を受け、シルラは礼を口にした。

「……いいから、早く降りようぜ」

置いてきぼりのガヌが、ほそりとつぶやいた。

身体検査を終えたサリアは、田隠しをされ、シルラに手を引かれてどこか分からぬところを歩いていた。ところどころから、「なんだ、あの子?」「さあ?」というような囁きが聞こえる。軍人ばかりの場所を田隠しをされた少女が歩いているため、浮いているらしい。

建物のどの辺りかさっぱり分からなくなつてからしばらくしたくらゝに、シルラの歩みが止まつた。彼女から声をかけられる。

「止まつて」

緊張が含まれていた。どことなく、張り詰めた空氣も感じる。そんな中で、シルラが大きな深呼吸をした。

「よし」

と、意を決したような言葉を小声で出したといひで、ノックの音がした。

「ガヌ=ロード中尉です。シルラ=マルノルフ中尉もあります。件の少女をお連れしました」

シルラは、何もしていない。ノックをしたのも、言葉を発したのも、ガヌだつた。ただし、相変わらずどこかだるやうであつた。

「どうぞ、お入りなさい」

男性の声が聞こえた。聞こえ方から察するに、部屋か何かがあるのか、その中からのようにだつた。

「貴様……」

「ほらー、シルラちゃん、嫌そうだったから。それより、さつさと入ろうぜ」

驚きを見せるシルラに、ガヌは軽い調子で返し、「失礼します」

彼女の返答を待たずに、どこかの部屋へ入る扉を開けた。

「……まつたく」

呆れたような声を出したシルラに手を引かれ、サリアも室内へ入る。

「一旦、田隠しをとるぞ」

そう呼びかけられ、ようやくサリアは視界が戻った。明かりが眩しく感じる。

徐々に慣れてきた目で、部屋の中の様子を確認した。“たつた一人”のためにあてがわれているにしてはかなり大きく、サリアの身近なもので表現するなら、学校の教室を二つくつつけたくらいの広さがある。床には赤の絨毯が敷かれていて、壁は白い。右側にはおそらく電報を打つのであろう機械が机の上に置いてあつた。また、多くの人間の顔写真が上方に飾られている。逆側には本棚と、なぜかワインを入れてある棚があつた。この部屋の主のものだろうか。トロフィーが無造作に乗つけられている。部屋の奥の方には軍旗、国旗が並び、グラスの入った小型のケースも置かれていた。額縁に収められた賞状が、その頭上にある。

そして、

「ご苦労様です。ガヌ中尉、シルラ中尉」

中央から奥よりにある大きな机には、白髪の多い老人の姿があつた。柔和な笑顔に反し、醸し出す雰囲気は厳かで緊張感がある。何が、得体の知れない恐怖を、サリアの身体は感じとつていた。

「その子が、“オモイノチカラ”を持つ少女ですか」

細い目が捉えてくる。サリアは、なぜか背筋に冷たさを覚えた。（なんだろう。この人、なんだかすごく嫌な感じがする）

そう“心の内”で思つたのだが、

「すごく嫌な感じがしますか。申し訳ないです。なにしろ、命のやり取りを何度もしていると、どうしても知らず知らずに対面している相手に重圧を感じさせてしまうんですよ」

目の前の老人は、それを読み取つた。サリアの表情が硬くなる。（どうして、私の考えることが分かるの？）

「人の考へることは、すぐに分かるんです、私は」
またしても考えていたことを、口に出される。

（まさか……）

「ええ。そのままかです。貴女と毛色は違いますが、私も“オモイノチカラ”を持つているんですよ。サリア＝ミユルフさん」
サリアの予感は当たつていた。目の前にいる老人も、特殊な能力を持つっているのだ。

「おつと。まだ名乗つていませんでしたね。私はクラカル＝エル＝ミッドハイムといいます。階級は総督ですが、“軍王”と言つた方が分かりやすいでしょう」

「“軍王”……」

ラスター＝ジ共和国の頂点に君臨する者の称号を、サリアは繰り返す。目の前にいる人間がまさに、当人であるミッドハイムだつた。

「ええ。驚かれたでしょ？　国のトップが私のような老人で」
彼は自分に關してそう言つたが、ただの謙遜にしか思えなかつた。素人目にも、隙がない。

「……そんな方が、私になんの用ですか」

サリアは明らかに警戒を表に出した。しわを寄せて、睨む。

「警戒されていますね。当然ですが、残念なところです」

言葉と裏腹に、老軍人の様子に特別殘念な感じはない。

「まあ、本当は貴女が私をどう思おうと、問題はないんですが」
自分で言つたことを、あつさりひっくり返す。サリアの考へていることに、深い興味はないらしかつた。

「重要なのは、あくまで貴女の持つ“力”。大変でしたよ。少ない

情報から、力についての予測を立て、その持ち主の居場所を把握するの

柔和な笑みを崩さないまま、軍王が告げてくる。

「つまり、用があるのは、貴女ではなく、貴女の能力です」「一個人をまるで無視した言葉だつた。彼にとつてサリアは、ただ単に力の所有者なのだ。

「貴女のオモイノチカラは、私のものと違つて、特殊な部分がありますからね。じっくり研究させてもらいますよ。今日はただの顔合させです。貴女の心の内から、力を持っていることは確信が持てましたし、もう退出していただきてかまいませんよ。地下の特別室に連れて行つてください、ガヌ中尉、シルラ中尉

「了解です」

「はい」

まだ笑みの裏にある表情を見せることなく、ミジドハイムは退室を命令した。部下二人が返事する。

「行くぞ、サリア」

シルラに手を再び掴まれた。彼女は逆の手で目隠しを出す。サリアの視界は、再び真っ暗になった。

「待ちなさい。シルラ中尉」

「はっ。なんでしょうか」

そのまま部屋を出ようかといふところで、ミジドハイムがシルラを呼び止めた。

「疑問を持つというのは、人として当然のことですが、中には持つてはいけない疑問というのがあります。なにより、遙かに上の階級の者がやることに逆らってはいけないものです」

「……はい」

「ますます裏を感じますか。まあ、どうしようとも貴女は貴女ですから仕方ありませんね。ただ、余計な詮索や邪魔は御法度ですよ」「上辺だけの返事は必要でしょつか」

「いいえ。本音との違いで私を笑わせたいというのなら、話は別で

すが

「……失礼します。行くぞ、ガヌ」

意味深な会話を交わしてから、シルラはガヌを促し、部屋を出た。サリアは自分の手を掴むシルラの手が、少し汗ばんでいるように感じた。

扉を閉めた音がした後、シルラはその場から離れだした。手を引く彼女は、少し足早になつているようにサリアは思った。

「シルラ。ここへんまで来れば大丈夫だ。そんなに焦つて歩くなよ。サリアちゃんがついていくの大変そうだぞ」

ガヌも同じことを思つていたようで、階段を下りたあたりで後ろの方から呼びかけた。

「つ……」

言葉にならない声を発して、シルラが足を止める。掴まれている手は、強く握られていたために少し痛かった。

「話なら後でいくらでも聞いてやるから、今はとりあえずゆっくり歩け。な？」

「ガヌ……」

常の毅然とした口調とうつて変わり、どこか泣きそうだった。

「大丈夫だつて。別になんにもしてきやしないさ」

「だといいが」

「つたぐ。いつもは強気な態度のくせに、打たれ弱いよな、お前つて」

「うるさい。どっちも私の性格だ」

「ああ、そうかい」

ガヌの声は、優しかった。シルラはシルラで、手の力がぼぐれる。サリアは自分の置かれている状況が、とても安全とは言えないと分かりながらも、一人の関係に考えを傾げずにはいられなかつた。

「ガヌ」

「んー?」

「お前に言つのはあまり気が進まないが、今日のところは礼を言つ

ておく。ありがとう。ノックの件も含めてな

「引っかかる言い回しだけど、どういたしまして」

続けての会話を聞いていて、サリアはとてもカリクに会いたくなつた。

（カリク。きっと、助けに来てくれるよね）

彼の積んできた訓練の数々を、サリアは一部しか知らない。しかも、戦い方を学んでいるからといって、助けに来てくれるという確証はない。それでもサリアは、疑わなかつた。きっとカリクは、自分が助けに来てくれるに間違いないと。

冷静さを取り戻したシルラに連れられ、サリアはまた基地の内部を移動した。今度は何度も階段を下りていたのに加え、少し涼しい空間へ出たので、おそらく地下だらうと予想した。

長い廊下を直進したり曲がったりを繰り返し、しばらくして、

「ここだ」

というシルラの声がしてから、扉を開ける音が響いた。辺りがとても静かなので、不気味さがあつた。閉める音も、同じ感じに耳に入る。完全に閉まりきつたところで、目隠しをはずされた。

「うわあ……」

さつそく開いた目に飛び込んできたのは、手狭な部屋だつた。しかし、思わず感嘆を漏らしてしまつほどに、綺麗な室内である。床は赤い絨毯が敷かれ、右奥には真つ白なシーツのベッドがあり、真ん中には花瓶を乗せたテーブルが置かれていた。下手な宿泊施設より、レベルが高い。

「貴女には申し訳ないが、ここにずっとといてもいいことになる。言葉を選ばなければ、監禁と言つてしまつて差し支えない」

あけすけな表現だつた。ガヌが肩をすくめる。

「まあ、そういうこつたな。出れても研究所に行くくらいだらう。

会えるのは俺たち軍人か、変な研究者共くらいだ」

「だろうな。ついでに伝えておくと、部屋の内外に監視も一人ずつつけさせてもらう。ただし、内側については、私から必ず女性にしてもらえるよう取り計らう。私もできるかぎりはいれるようにする。貴女は嫌かもしけないが」

彼女らの言葉は、とても誘拐犯という悪人に思えないものだった。思わず、

「いえ、そこまでしていただかなかくても」と、遠慮してしまった。

「いいや。できりかぎりはさせてもらう。貴女は気にしなくていい」「そうそう。こっちが勝手にやるって言つてるんだ。ただでさえ強引に連れてきたんだし、埋め合わせにはならないだろうが、素直に受け入れておいてくれ」

やはり、悪人には思えなかつた。

「ただ、今日のところは私たちは失礼させてもらう」と
があるのでな。貴女も休むといい。ゆつくりとは言わないがな」「は、はい」

口調は堅いが、思いやりのある彼女にサリアはうなずいてみせた。
そこで、外から声がした。

「ガヌ中尉、シルラ中尉。お待たせいたしました」

監視の人員である。ガヌが部屋の扉を開けると、男女が一人ずつ、
外に立つていた。

「おー、じ苦労さん。行こうぜ、シルラ」

「ああ。ではな、サリア」

ガヌの呼びかけに応え、シルラはサリアにあいさつしてから、二人で扉へ向かつた。去り際、シルラは監視の一組に、「上客だ。困らせるなよ。手荒な真似もするな」

そう言い聞かせた。

「……過保護だねえ」

隣では、ガヌが苦笑していた。

要人を匿うための地下室を後にし、シルラはガヌと肩を並べて、廊下を歩いていた。

「で、何を考えてたんだ。あいつになんか言われたろ」

あいつとは、ミッドハイムのことである。切り出したのは、先ほど総督室を出るときのことだった。

「ああ、あれか。ずいぶんとあつさり、あの子との対面を終えたなと思つてな」

「あー、確かに誘拐させるほど」「執心なわりには、特に目立つたことはなんにもしなかつたよな」

「そうだろう？ まるで、今のあの子には用がないようだつた」

「用がない？ どういうこいつた」

ガヌが訝しげな表情を浮かべた。

「はつきりとは説明できん。なんとなく、そう感じただけなのでな」
彼の問いに、シルラは首を横に振った。

「なんにせよ、あの子にこれからいいことが起きるとは思えん。せめて、人間として扱つてもらえればいいが……」

心配そうに、歩いてきた廊下を振り返る。ガス灯が怪しく並んでいた。

「人間としてつていうのは無理だろうが、貴重な人材だ。研究者共も“いつもみたく”乱暴にはしねえさ。それに、させたくもないんだろう？」

「当たり前だ。せめて、私が手を出せる範囲は救つてやりたい。それに、お前も見ただろう。彼女を攫うときについた少年を。彼と引き裂きたいと思うか？」

熱い口調だった。同時に、研究者たちへの嫌悪感も混じる。傍らを歩ぐガヌの目を見つめた。

「んあ？ い、いいや、思わないな」

彼は、一度目線を泳がせたが、最終的には目をしつかり合わせて答えてきた。

「お前はいなかつたけど、あのとき奴は銃を向けるのをためらわなかつた。余程、大事な存在なんだろうな。“引き金を引く覚悟”があるかどうかは、まだ分からぬけどよ」

シルラから目を離し、前を向く。少年のことを思い出してか、顔には微笑みがあつた。横顔に、シルラは尋ねた。

「……あの子を、救えると思うか？」

「それは分からぬ。分からぬが、俺は賭けてるぜ。何かしてくれることでな」

表情を変えずに、強く言い切った。

「そうか。なら、私もそう考えておくとしよう。どうせ……」

シルラは自嘲気味に微笑んだ。一度言葉を切り、横目で後ろを見る。

「私たちが何かを起こしても、どうにもならないのだからな」

ガヌとシルラが地下を後にしてくれくらいたつただろうか。サラアは、女性軍人の監視の下、できることもなくベッドに横たわつていた。外が見えないので、時間が分からぬ。かといって、見張りをしている軍人に訊く氣にもならなかつた。

心の中は、不安でいっぱいだつた。これからどうなるのか、まったく分からぬ。ミッドハイムのことも、不気味だつた。一体、何をされ、何をさせられるのか、皆目見当がつかない。（カリク……）

幼なじみの少年の名前を、心中で呼ぶ。彼女の場合、本当に彼へ届くかもしれない呼びかけだつた。ただし、どういう条項が満たされていれば伝わるのかが分からぬため、望み薄の行為である。と、そこで地下室に訪問者が現れた。

「邪魔するぞ」

「お、お疲れ様です。シルラ中尉」

シルラだった。監視をしていた軍人が、慌てて頭を下げる。

「ああ、お疲れ様。悪いが、少し彼女と話したいことがあるから、席をはずしてくれるか？ 三十分ほど、休憩にしていい」

「休憩ですか？ しかし、今は私の監視時間帯で……」

「いいから、行つてこい。私が勝手に代わると言つているだけなのだからな」

「わ、分かりました」

渋る部下の肩を叩き、シルラは微笑んだ。そう何度も上司の頼みをつっぱねられないと思ったのだろう、部下は承諾した。「失礼します」と言つてから、部屋を出る。サリアとシルラだけが残った。

「……何か用事ですか？」

敵意はなく、ただ純粹な疑問だつた。

「用事だな。ただし、個人的な話だ」

シルラは、部屋の真ん中にあるテーブルの椅子へ腰を下ろした。背もたれに体重をかける。

「個人的な話？」

彼女からの個人的な話とはなんだろうかと、サリアは首をひねる。思い当たる事柄がなかつた。

「ああ。メシアで貴女を強引に連れ去ろうとしたとき、少年があの場にいただろう。彼のことでちょっとな」

「カリクのこと……？」

ますます、どんな話をする気なのか分からなくなる。カリクの話というのはなんなのか。彼とは、関わりがないはずである。

「そうだ。私はちらつと見ただけだが、彼は貴女を護ろうとしていたのだろう？ ガヌはナイフを持っていた。なのに、あの少年は貴女を護るために、奴と対峙した」

「それが、どうかしたんですか？」

彼女が何を言わんとしているのかが、見えてこなかつた。

「特別どうというわけではない。ただ、彼にとつて貴女が、命懸けで護りたい大事な存在だというのを確かめたかつただけだ」
サリアの問いに、シルラは微笑む。その瞳に、ある感情が浮かんでいる気がして、尋ねた。

「シルラさん、羨ましいんですか？」

瞬間、眉が動き、彼女は目を見開いた。まさかとサリアは思つていたのだが、間違つていなかつたらしいと思い直す。シルラの瞳に浮かんでいた感情は、羨望だった。

「羨ましい、か。そうだな。私は、あの少年に命を張つてもらえる貴女が、羨ましいのだと思う」

今度は言葉でも認める。続けて、サリアへ訊いてきた。

「貴女から見て、あの少年はどんな存在だ？」

軍人としてではなく、一人の女性としての質問に、サリアは思えた。ゆえに、同性の一人として答える。

「大切な人です。家族とは違うけれど、とても特別な位置付けにいる人。それが、私にとってのカリクです」

「ふん。恥ずかしげもなく、よく言つてくれるものだ。憎たらしくなつてくる」

頬杖をつきつつ、シルラは苦笑した。穏やかな空気が流れる。自分が捕らわれの身であるのを、思わず忘れてしまった。

「シルラさん。私からも、一つ訊いていいですか」

「なんだ？」

「ガヌさんとは、どういう関係なんですか」

その雰囲気に乗じ、ずつと気になつていてことを訊いてみる。ここまで彼らと場所にいて感じ取つたかぎり、ただの同僚には思えなかつた。

シルラは、最初こそポカんと口を開けたが、

「ガヌか。別に、あいつはただの同僚だ」

すぐに素つ氣ない言葉を返した。ただ、表情には寂しさがよぎつた。恥ずかしさでも、動搖でもなく、寂しさである。何がある。直

感が告げていた。

「本当に？」

試しに、追い討ちをかけてみる。今度の返答は、早かつた。

「本当だ。他に何があるわけでもない。たまたま同期で、たまたま同じ任務にあたるのが多いだけだ」

強い否定だった。だが、表情との総合を考えると、サリアはそのままの意味で受け取れなかつた。

「シルラさん……」

はつきりとした言葉にはせず、その一言に思いを詰める。向こうも察したようで、

「詳しい事情は分からぬが、ガヌは何かを背負つてゐる。近づいたとしても、真に深いところでは踏み込まぬとしない。誰にもな」

短くも、的確な表現を紡いだ。詳細は云わらなくても、彼女の想いは感じ取ることができた。

「だから、私も隣に行けない。行こうとしても阻まれる。どうしたらいいのか、もう分からぬ、私は」

肩をすくめ、彼女は天を仰いだ。サリアに向き直り、話しかけてくる。

「貴女は、軍のトップが関わる陰謀の中に置かれていたながら、見たところ絶望していない。なぜだ？なぜ、そんなに輝いた目をしていられる？」

なされた質問は、サリアには簡単に答えられるものだつた。一瞬、目を細め、口を開く。

「シルラさんとガヌさんが、誘拐犯らしくないから、つていうのも”ありますね。でも、一番大きい理由は……」

一呼吸置き、堂々と言いつ切る。

「信じているからです。きっと、カリクが来てくれるつて。どんなに困難でも、どんなに相手が強大でも、カリクなら、きっと」

疑いはなかった。証拠のない自信だが、それがサリアにとっての事実なのである。

「信じているから、か。なるほどな。それが、絶望を打ち消す方法か」

シルラは、口元をわずかに緩ませる。どこか、すつきりした感じだった。

「礼を言つ。私も、貴女と一緒に信じてみよう。もう少しだけ、な……」

彼女の目線を受け、うなずく。心の内で、少年を想つた。

(信じてるみ、カリク)

揺らぐことなく、輝き続ける。

五章『闇での遭遇』

少し、時間は巻き戻る。サリアが首都で、地下室に入れられたらいいだつた。

原っぱの真ん中を貫くように伸びる、とりあえず道として整備されたオフロードを、一台の車が走っていた。白の車体のそれは、カリクとレインの乗っているものである。一人がニケアを出て半田以上が経ち、太陽の位置は低くなつていた。

「首都まで、あと丸一日くらいか。確實に燃料不足だなー」

「……別に、今更念を押さなくても、やるときはやる。手段を選んでいられないって言つたはずだ」

助手席に座るカリクは、ハンドルを握るレインの顔を見ることが言葉を返す。いかんせん、免許を取得できる年齢に達していない二人は、免許など持つていないのでから、燃料は勝手に押借するほかない。

「悪かつたよ。まあ、金を置いていくつもりだつてだけで、良心的だと思ひやせ」

レインが唇の端を持ち上げる。横目で見てきたので、

「前見ろ」

と、冷たく言い放つた。

「へいへい。つれないわねえ、カリク君は」

気持ち悪い口調で文句を垂れ、レインは前に向き直つた。と、何かに気づいて、ブレーキを踏む。助手席のカリクは前につんのめつた。体勢を直してから、隣の少年を睨む。

「なんだ、急に」

「ああ、悪い悪い。あれが目に入つたもんで」

まったく誠意の感じない謝罪の後、前方を指差した。そちらに田元をやると、

「なんだよ。ただの立て札だろ」

二方向に割れた分かれ道と、どこに続くかを表記した木の札がつた。片方は、首都セルゲンティスへ向かう道。もう一方は、長く北のミリシアへ繋がっている道だつた。あとは、最寄りの町の名前と、だいたいの距離が書かれている。

「あれ自体はな。書かれてる、最寄りの町が問題なのさ」

レインが、言いながら車を降りる。首をひねりながら、カリクも続いた。一人で、札の前に立つ。

「このミリシア方面に書いてある、シャズって町だ。ここに、確か軍の秘密の施設がある」

「秘密の施設？ シャズに、軍の施設なんて、なかつたと思うんだが」

顔をしかめた。成り立てとはいえ、少将の父を持つカリクですら、そんな話は聞いたことがない。

「そりや、秘密だからな。俺っちが知つてるのは、境遇と偶然のせいだよ。首都の研究所と軍の、かなり上の方の人間じやないと、普通は知らない」

軽い口調のレインだが、話している内容はかなりとんでもない。少将クラスよりも上の人間しか知らない情報を、なぜ知つているのか。

「お前、何者だ」

素直に思つたことをぶつけてみる。

「この国の被害者、かな？」

含み笑いから真意を見い出すことは、カリクにはできなかつた。

「とにかく、シャズには間違いなく施設がある。見つけられるかどうかが分からんけど、痕跡があれば俺っちが探し出せるかもしれない。どう？ 寄り道になるけど、探つてみるかい」

自分についての話を切り、レインはそう尋ねてきた。カリクは、黙考する。寄り道なので、時間が無駄になつてしまふかもしれない。しかし、父親も知らない情報が手に入る可能性もある。ほほ、何も知らない現状では、かなり重要なものになるのはまず間違いなかつ

た。

サリアを助けるために時間を無駄にしないか、それともサリアを助けるために寄り道をするか。しばらくして、カリクは結論を口にした。

「……シャズに行く。早く出るぞ」

「おっ、即断即決とは素晴らしいね。さすがカリク君
カリクは無視して、車へ戻る。後ろから、

「もう少し相手してくれても、いいと思うんだけどなー」
と聞こえたが、気のせいにした。

三十分ほど車を走らせてたどり着いたシャズの町は、カリクの家があるキュー＝ルよりも、さらに小さなどころだつた。ほとんどが農業と畜産業を生業にしているので、感覚としては村に近い。人工的なものが少ない、緑と土と空が存分に見られる景色を眺めながら、カリクがつぶやく。

「……家と人と、牛と畠しかないな」

「いやいや。牛乳と牛肉とチーズもあるぞ」

「飲食物が増えただけだろ、それ」

すかさずつぶやきを拾つてきたレインに、『氣のない言葉を返す。

「おお……」

すると、彼は完全に横を向いてきた。目を見開いてくる。何事かと一瞬訝しみ、すぐにあることに気づいた。

「どに田を向けてんだ！ 前を見る、前を！」

「あ、ごめん」「めん」

指摘され、慌ててレインは前へ顔を戻す。特に何も起きなかつたが、場合によつては大惨事になつていてもおかしくない行為だった。声を荒げる。

「何してんだよ！ 下手したら、事故だぞ！ 誰か轢いたら、シャ

レにならない！」

「悪かつたつて。いや、まさかカリク君が、俺たちの発言に、ツツ
ゴミを入れてくれるとは思つてなかつたんで、びっくりしちまつて
さあ！」

一方のレインは、あまり脇見運転自体には動搖していない。別の
事柄に驚いていた。彼の言い訳を聞いて、思つ。

（雑に流した言葉がツツゴミ扱いとは……）

い�いに驚かれていては、命に関わるので今後はもう少し反応し
てやろうかと、本気で考え出すカリクであつた。

「それにしても、お前の言つてる施設はどのあたりにあるものなん
だ？ 町の規模が小さいにしても、しらみつぶしに探す余裕はない
ぞ」

一旦、ツツゴムツツゴまないを脇に置き、施設についての話題に
移る。

「んー。見当をつけたしたら、廃屋だな。人が住んでないのに、
人の出入りした跡があれば、限りなく黒だ。軍内部でも一級品の機
密事項を扱つてゐるところなんだから、あんまり人が近づかない場所
にあつて然りだらうぞ」

「廃屋か……。探してみるしかないな」

この小さな町なら、合致する建物はさほど数多くなさそうだった。
まずは役場などがある、町の中央へ車を走らせた。

「今のところ、一番怪しいのはここかな」

かすれた文字で、『宿泊施設・ジャッジ』と書かれていた。郵便
受けを見たところ、ジャッジはファミリーネームらしい。

町中を回つた結果、廃屋はやはり数少なく、その中でレインが目
をつけたのは、かつて宿泊施設だったのであろうこの建物だつた。
一階建てだが、敷地が広く、おそらく潰れてから年単位は経つてい

そうな様子である。

「施設にするなら、ある程度の広さが必要だから、ここが一番怪しい、か。確かに、見方としてはありだな」

カリクは入り口を少し見つめ、中へいじり足を前へ動かした。
「動き出すの早いなー」

後ろからそう言つてきたレインへ、

「時間が惜しいからな。何度も言わせるな」

横目だけを向けた。すぐに前へ戻す。「へいへい」と氣のない返事のち、相棒となつている少年は横に並んできた。

中は薄暗かつた。まだ夕日が差し込んでいるものの、仄かな橙色は、不気味さを演出している。あちこちにホコリが溜まっていた。
「長いこと使われてなさそうだな」

天井の隅に張られている蜘蛛の巣を見上げながら、カリクはそう口にした。

入つてすぐにある、ロビーらしき場所だった。宿泊施設のロビーだが、見た感じは病院の待合室に近いものがある。受付が左にあり、あとは右隅に至るまで五人がけくらいの長椅子が、三列ほど並んでいる。廊下は、正面と左の二方向に伸びていた。

「いいや、そうでもないかもしれないぜ、カリク君」「何？」

自分の言葉に対するレインの返しに、耳を疑つた。

「ホコリの積もり方に、なんか差があるんだよ。例えば、こことか」
彼が示したのは、受付の内側へ入るためにある、小さな地面から浮いた扉だつた。細い扉の上部を見ると、ホコリの濃さが違つて見えた。一度なくなつてからまた積もつたという感じである。

「なるほどな。誰かが一回触つて、積もり方の差が出てるわけか。でも、近所の子供が遊びに来ただけかも知れないぞ」「そーだなあ。でも、俄然やる気出できたぜ」

「なんのやる気だ」

先ほど頭に浮かんだ考えのとおり、氣のない感じながらも言葉を

返す。するとレインは、振り返ってきて、

「なんか、宝探しみたいで、ワクワクするじゃんか」

活き活きとした表情をした。カリクは、肩をすくめただけだった。

やり取りもそこそこに、一人は探索に移る。

「うーん。ここもはずれかな。なんの形跡もないし」

「じゃあ、次だな」

レインの発言を受け、カリクは先に部屋から廊下へ出る。「ほい」と、レインも続いた。

二人は一緒に行動して、廃屋の中を探索していた。分かれてもよかつたのだが、万一ここに施設があり、何者かがいたら危険だとう判断だった。日が沈みかけており、灯りもないというのもある。

回り方としては、ロビーから左に伸びていた廊下の方へまず行き、一部屋一部屋確認しながら、一週してロビーの方へ戻るというよつなやり方にした。五部屋程度確認は終わっており、今のところ何も発見はない。

「ん、廊下が一手になってる」

おそらく半分あたりと思われるところで、レインが足を止めた。廊下が真っ直ぐと右折に分かれていたのである。徐々に面積を増している暗闇の中、ホコリをかぶった案内板のかすれた文字を日を凝らして読み取つたところによると、直進すると食堂と浴場があるらしい。

「先にこっちに行くか

「あいよー

特に後回しにする理由もない。一人は直進した。ほどなくして、

右手に両開きの扉が現れた。扉の上を見ると、“大食堂”とある。ただ、食の字はほとんど判別できなくなっていた。

「では、失敬」

レインがカリクの前に出て、扉をゆっくりと内側へ開ける。錆びた音が響いた。中には、乱雑に椅子が乗せられた机が並んでいる。

二人とも中に入り、カリクが後ろ手で扉を閉めた。

「……一層汚いな、ここは」

カリクがつぶやいた。廊下よりも、空気がまずくどんよりとしている。

「そうだな。でも、ここは当たりかもしないぜ、カリク君」室内を見回していると、レインが閉めた扉の方を向いて屈み、床を見ていた。

「どういうことだ？」

「入り口とおんなじだよ。ホコリが薄いところがある。つい最近に、扉が開け閉めされた痕があるし」

「何？」

彼の言葉を聞いて、カリクは隣にしゃがみ込んだ。確かに、入り口よりもはつきりと、ホコリの濃さが違っていた。

「誰かがここに入ったってことか」

「そういうこと。しかも最近だ。下手したら、ついさっきかもしれないぜ」

説明しつつ、レインは腰を上げる。顔には、いたずらっぽい微笑を浮かべている。

「ついさっき、か」

もし本当に秘密の施設がここにあり、扉を開けて食堂に入った人間が施設に関係しているならば、見つかるとかなりますい。秘密裏にされている場所なのだ。親切に、玄関まで送つてもらえるとは思えない。

「慎重に探るぞ。お前の見立てが正しいなら、敵と遭遇するかもしない」

「あいよ」

声を抑えたカリクの言葉に、レインが呼応する。それから二人は、食堂内を隅々まで確認していったものの、壁にも床にも、怪しい痕

跡は見られなかつた。

「あつりー？ こりや、はずしたかな」

一番右隅の壁におかしなところがないのを確認したレインが、首をひねつた。危機感なく、声を響かせる彼に、カリクは眉根を寄せる。

「敵がいるかもって言つたよな。あんまり、でかい声を出すな」

「いや、もう、むしろ見つけてもらつた方が楽だと思つぜ。無駄な時間と労力が省ける」

「敵にやられて、時間が止まるかもしれないけどな」

身体を伸ばしながら、暢気な発言をしたレインに、皮肉を込めた言葉を贈る。今のところ他の人間の気配は感じないが、痕跡があつたのだから、油断はできない。

「確かにそうかもしねいけど、あんまり氣を張りすぎてもどうかと思うぞ、カリク君。現に、今俺たち生きてるし、敵の姿も見てない。見えないものに氣を使うことほど疲れることはないぜ」しかし、対する少年は氣楽なものだった。笑顔を見せる余裕はある。

「……ずいぶんと樂観的だな」

「んー、そうか？ まあ、そうなのかもな。『そうじやないとやっていけなかつたし。』」

カリクがジトリとした目を向けると、レインは調子を変えた。「なく、そう言つた。いかにも、意味ありげに。

「ああ、そうかよ」

カリクは短い言葉を口にしただけで、今の話題を切つた。もちろん、レインの言い回しは氣になつていていたが、掘り下げる必要性はないという判断をしたためである。

気持ちを探索に戻す。食堂はもういいだろうと思つたカリクの目線は、奥にある厨房に向いていた。食堂と直でつながつており、二人の位置からも中を窺うことができる。鏽だらけで、鍋がひつくり返つっていたり、包丁類が乱雑に置かれていた。落ちてゐる、と言つ

た方が適切かもしねりない。

「あの中も見てみるか」

「ん、厨房か。そうだな、一応見てくか」

カリクの案に、レインも乗つかる。一人で、食堂端から厨房へと入つた。

内側から見ると、中の荒れ具合はより酷かった。人が三人は通れるであろう通路があり、床は油染みや鏽が覆つていて、やはり食器類や調理器具が散乱している。手前には水場があり、その隣には火を扱うのである場所がある。どちらも、今は使えそうにない。一番奥には、人間一人は突っ込めそうな大きさの冷凍庫が見えた。

「…………」カリクは漏らす

「うつた。隣のレディンセーなんやく。

「どうあえず、見てみるか」

観察もそこそこに、本格的な探索に入る。戸棚なども丁寧に見て回るが、特に不審な点はなかつた。

「うーん……。ここにも、なんもないのか。俺つちから提案したいんだけど、気が滅入つてくるぜ。汚いしー」

リーンが水槽の周辺をいしゃりながら叫ぶ。涼風のそばにいたカリクは、たしなめる。

「元々、機密なものなんだ。簡単には見つからないだろ。もしかしたら、見つからぬまま終わるかもしれないんだ。もう少し辛抱強く探せー

「アーチ二二二。正面アーチ二二二。アーチ二二二。」

文句は言いつつ、手は止めない。言葉ほど、我慢が利かないわけではないらしい。カリクも、黙々と作業を続ける。冷凍庫を開けようとして、手をかけた。手前に引っ張る。その感触に、眉をひそめた。

「ん？」

「どうかしたのか、カリク？」

レインが気づき、後ろにやつてきた。肩越しに覗き込んでくる。「いや、この冷凍庫、長いこと放置されているにしては、簡単に開きすぎる気がして……」

しゃべりつつ、開く。生肉や魚、またそれの鮮度を保つための氷類もなく、空っぽだつた。一見、おかしなところはない。しかし、今度はレインが気づく。

「なあ、底のところがはずせるんじゃないか。妙に綺麗だぜ」「確かに、そんな感じがするな。ちょっと待て」

カリクがしゃがみ、冷凍庫の底をいじつてみる。すると、動く感触があった。

「当たりだな。上か下に押すと、横にスライドさせられるみたいだ」言いながら、実際にやってみせる。完全に動かし終えると、さうに深い闇へと誘うであつて、下り階段が待ち受けていた。

「地下への階段、か。よくもまあ、こんなもんを作ったもんだ」「だなー。でもまあ、首都の奴はやることがぶつ飛んでるから、想定の範囲内ではあるけど」

一人で、ぽつかりと口を開けた闇を覗き込む。先はほとんど見えない。

「さすがに灯りがいるな。レイン、お前なんか持つてるか」「いや、俺つちは持つてない。でも、廊下にガス灯ならあつたと思うぜ。付くかどうかは分からぬいけど」「試す価値はあるな。行くぞ」「あいよ」

単独は危険だという意図を汲み取り、レインが同意を示した。一旦キッチンを離れ、食堂を通り抜けて廊下へ出る。ガス灯は、壁から伸びた台座にくつついていた。

「ん、固定されてる」「関係ない。とりあえず、離す」

レインの言葉を弾き、服の内に隠していた銃を抜く。ためらいなく、壁とガス灯をつないでいる部分を打ち抜いた。甲高い銃声が響

く。ガス灯が、床に落ちた。レインが口笛を吹いて、「過激だね」と軽口を叩く。

「敵さんを警戒するんじやなかつたの？」

「でかい声を出してたお前に言われるとはな。別に、構わないさ。あの隠し戸を開けた時点で、地下に音は響いているだろ? から、今更、感づかれることを警戒する必要はないだろ」

「そんなもんか?」

カリクはガス灯を拾うと、火がつくかどうかを試した。問題なく、仄かな紅い光が灯る。首をひねっているレインに呼びかけた。

「行くぞ」

「あいよー」

灯りを片手に、暗闇への入り口へと戻った。踏み込む前に、カリクは傍らの少年へ問いかける。

「準備はいいか、レイン」

「もち。そつちこそ、ひびるなよ」

「ふん」

返つてきた答えを聞き、カリクは満足そうに鼻で笑つた。今から潜る黒を真つ直ぐに見つめ、

「じゃあ、下りるぞ」

「よしきた」

カリクを前にして、二人は階段を下りだした。

「本当に真つ暗だなー。ただでさえ夜だつていうのもあるけど、上の光が全然届いてねーや」

数十段進んだところで、レインが後ろを横目で見た。カリクも声につられて、振り向く。それほど実感はなかつたが、既にそれなりの深さまで潜つてきていた。

歩み続けると、やがて階段が終わり、開けた空間に出た。端っこ

は目視できないが、足音の反響音でなんとなく広さを想像する。「けつこう広そうだな」

「だな。ちょっと、壁際を見てみようぜ」

レインに促され、壁づたいに部屋の左端へ行く。カリクの手中にあるガス灯が、“それ”を照らし出した。

「……なんだこりや」

あつたのは、多くのボタンやレバー類だった。簡単に言えば、巨大な機械が設置されていた。

「へえー。これ、首都でも限られたところにしかない、“パソコン”つてやつだぜ」

「パソコン？　なんだそれは」

聞き慣れない単語だった。

「俺たちも詳しくは理解してないんだけど、なんでもいろんな情報とかを保存したり解析できたりするらしい。ざっくり言うと、すごい機械つて感じだな」

「一ミリも分からないな。とりあえず、こいつは今、使えるのか？」

説明されてもピンとこなかつた。話題を変える。

「いや、たぶん大本のエネルギーが供給されてきてないみたいだから、使えないと思う」

「その大本のエネルギーって、なんだ？」

「そこまでは分かんない。首都の研究所にあつたやつは、原理は理解できなかつたけど、風とか火とかから動力を作つてるとかなんか聞いたな」

「風に火？」

ますますわけが分からなかつた。その要素からこの機械を動かすといふのが、腑に落ちないのである。“電気”というエネルギーがこの国で発見されてから歴史が浅く、カリクが科学分野の知識を持つていなかつたので、当たり前のことだつた。

「まあ、細かいことはメシアの工場のことでも調べてみなよ。多少なりとは、学べると思うぜ」

しゃべりながら、レインは眼前の機械をあちこち触りだした。しかし、反応はまったくない。

「んー、やっぱダメか」

「それはもういい。こだわる理由もない。他に何かないか探るぞ」頭をかく彼に、カリクはそう声かけをした。時間がもつたいたいないというのもある。大きな機械から光源を離し、別の場所を見ようと振り向いた。

「右に避ける、カリク！」

と、不意にレインが叫んだ。反射的に言われた通りの方向へと避ける。その数瞬後に、機械の方へ何かがめり込んだ。カリクはわざわざ振り向いて確認したりはしなかった。疑いなく、銃弾に間違いなかつたのである。敵に場所が丸分かりになつてしまふと考え、ガス灯の光を消した。完全に近い暗闇が、身体を包み込む。

しばらく、音すらも消えた。カリクは、見えざる敵に位置を悟られまいと黙つて、物音も立てないように息を潜めているのだが、レインと見えざる敵も、同じことをしているらしかった。

それから一番に耳に入つた音は、低く重たい男の声だつた。

「よくできたガキどもだ。動いたら危険なことを、よく分かつている」

カリクのでもレインのものでもない、敵の声。口を開いたわけが、痺れを切らしてか、それとも余裕からかは判断できなかつたが、とにかく聴覚で敵の位置を探りにかかる。

「それにしても、お前ら何者だ？　ただのガキなら、こんな冷静な判断はなかなしない」

カリクは、何も答えなかつた。レインも、黙つている。

「返事もなしが。ふん、本当によくできた奴らだ。それとも、怖くて動けないだけか？」

男の言葉が続く。

（ちつ。だいたいの方向の予想ができるくらいか。位置が全然分からねえ）

しかし、場所の予測が立てられない。内心でカリクは悪態をついた。

そのとき、近いところから何か風を切るような音がした。聞いた

」とあるものだった。

「ぐつ！？」

男が突然、苦しげに声を漏らした。何が起きているのかはまったく見えないが、先ほどの音から察する。

（さつきのは、“刃物が風を切る音”だ。レインが攻撃したか）納得できる解答を引き出すと同時に、疑問も生まれる。

（けど、どうして敵の位置が分かるんだ。ある程度、暗闇でも目の中利く俺すら、なんにも見えないっていうのに）

「ずいぶんと、厄介なことをしてくれるものだな。暗闇で正確に、位置を当てるか。数ヶ月前に、火事に乘じて“ジーニアス”から逃げ出した子供がいたと報告をもらっているが、お前がそうみたいだな」

（“ジーニアス”？）

ひそかに首をひねる。耳にしたことのない単語だった。おまけに、火事や報告といった、気になる言葉も混じっている。

ただ、当の本人はやはりしゃべらない。口車に乗つて、うつかり場所を知らせまいとしているのだろうか。

「うちがあかないな。奇襲も失敗しているし、そっちがこっちの場所を把握できるなら、この状況にこだわる理由はあるまい」

彼の対応を受け、敵の男がそう言うと同時に、急に明かりが点いた。ガス灯ではない、何か人工的な光だった。

「あら、電球つすか。まいったね、こりや」

姿が晒された時点で、レインはすっぱり黙るのをやめた。敵へ目をやる。カリクも、彼と同じ方向を見た。

立っていたのは、大柄な男だった。筋肉質で、岩のような出で立ちをしている。重厚という言葉が、カリクの頭に浮かんだ。黒の軍服を着ていることから、軍の関係者であるのは、疑いようがない。男は、右手に黒く光る拳銃を手にしていた。

「さて、これで心置きなくしゃべれるだろ。好きに話すとしよう」

男の顔に、嫌らしい笑みが浮かぶ。下品な感じだった。

「あんた、軍の人間か」

カリクが口を開いた。まず、確認する。

「そうでないとしたら、何に見える？」

相手は、わざとらしくそう答えた。まじめに言い方だが、軍人で間違つていないらしい。

「それにしても、もうずいぶん前に捨てた施設に、まさか侵入者がいるとは思わなかつた。お前ら、何をしに来たんだ？」

「さあてね。なんでだと思う？」

レインがうそぶいた。しかし、敵の男は特に怒る様子もなく、想像もつかないな。情報が足りない

冷静な返しをした。肩透かしをくらつた気分なのだらう、レインは眉をわずかに潜めた。

「それに、分からぬなら分からぬでもいい。お前たちの目的がなんだらうと、やることは変わらないからな」

彼の反応を気にとめず、男は手にある銃を、二人に示してきた。

「こひで、死んでもらひ」

抑揚なく、言い放つ。殺すといふことへのためらいが、欠片も見られなかつた。カリクとレインが、声を揃える。

「「断る！」」

カリクもためらいなく、まず銃を持つ敵の手を狙つて発砲した。狙いを瞬時に察せられ、寸前の間で避けられる。

「ちひつ」

軽い舌打ちをしながら、カリクは敵から目を離さずに、左へ走つた。男との間に挟めそうなものは、何もない。ゆえに、身を隠せるものがあるかもしれない、男が来た方向に抜けたかつた。入り口に戻ろうとしたところで、狭い階段では狙い撃ちされるのが閑の山なのである。

「ビックリしたな。まさか、ガキが銃を持つてるとは

「最近の子供は進んでんだよ」

カリクが適當な言葉を返す。

「そういうことだ！」

それにレインも乗つかった。同時に、ナイフを飛ばす。男は、ナイフを軽いステップでかわす。ひそかにつぶやいた。

「一対一、か」

カリクは相手の銃口から目を離さないように、男から距離をとる。（押し切れる。相手の方が地力は上だが、俺とレインの力を合わせれば、勝てないことはない）

考えを巡らせていると、声が挿まつた。

「二人で押せば勝てる。そう思つているだろ？」

図星の指摘だった。しかし、なんとか動搖は押さえ込む。男の表情をうかがつた。

「甘いな。もしそうなら、一人いっぺんに相手したりしない」

氣味の悪い微笑があつた。思わず、背筋が凍つてしまふほど。

そして、トンと、この場にいる三人のものではない足音が、静かに、しかし確かに響いた。方向は、男の背中に見える廊下のようなく方からだつた。

「複数かよ……」

意味しているのは、別の人間の存在。カリクの計算を、たやすく崩してしまふ要素だつた。

「おいおい、これはヤバげだぜ、カリク君。どうする？」

ナイフを構えるレインも、当然その足音に気づいていた。口調の軽さとは裏腹に、うまく笑えていなかつた。

「……決まつてる」

問われたカリクは、敵の方へ見つつ答える。そんなに難しいことではない。本来の目的を考えれば、一択だつた。（こんなところで終われるわけがないだろ）

選択肢は、逃走しかなかつた。ただ、大きな問題として、入り口へ戻る場合、完全に背をとられてしまうことがある。そうなれば、まず間違いなく簡単に命を落すことになつてしまつ。（どうする……）

必死に頭を活動させる。

(どうするー？)

自分たちがいるのは、開けた空間。遮蔽物になりそうなものはない。入り口に通じる階段と、先の見えない廊下がある。上には、光を発している物体が五つほどぶら下がっていた。その刹那、答えが閃く。

「レイン、援護しろ！」

「何を！？」

叫び返されたことを無視し、カリクは銃を構えた。敵にではない。

「何を……？」

狙いが分からぬよう、敵の男は顔をしかめた。「こちらも意に介さず、弾を放つた。直後に、ガラスの弾けたような音が響き渡つた。

「な……」

「なーるー！」

男とレインが、それぞれ反応する。カリクが撃ったのは、五つある電球のうちの一つだった。光源をなくすつもりなのだ。

「させるか」

心外だと言わんばかりに、男は言葉を漏らした。カリクに銃口が向ぐ。

しかし、

「させるかをさせるか！」

陽気な声とともに飛んだナイフによつて、狙いはズレた。その間に、カリクは一つ、三つと光源を破壊していく。

「無駄なあがきを……」

「無駄かどうかは、やつてから判断してくだされー！」

レインの攻撃が続く。そして、ついにすべての電気が消え去った。再び、暗闇がすべてを包む。

「レイン！ 僕を引っ張れ！」

「ほいきた！」

その中で、声だけのやりとりを交わした。敵の声が彼さるよつに響く。

「逃げられると思うな！」

おそらく、攻撃しようとしたのだろう。かすかな音が耳に入った。しかし、いつまで経つても、銃声はない。

「逃げてみせるつての！」

レインが、攻撃を途絶えさせていないからだつた。目視はできていないが、彼はナイフを投げていると、手を引かれるカリクには、音となんとなく伝わる動きから想像がついた。そのまま、入り口へと通じる階段を上がり出す。威嚇で、カリクは一発撃つた。

「さあて、こいつからどうするんだカリク君？ 後ろから撃たれたら終わりだぜ」

先を行くレインから問われた。こともなげに答える。

「問題ない。上がりきるまで、下に弾を打ち続けてやれば、向こうは階段を上がつてこれないはずだ」

同時進行で、引き金を何度も引く。床に着弾した音が何度もする代わりに、敵からの攻撃はこなかつた。

しばらくして、一番上に薄い光が見えてきた。太陽やガス灯を光源としていない、夜という灯りである。

「あと少しだぜ、カリク君！」

レインが叫んだ。耳には入れているものの、特に返事はせず、下方へ撃ち込み続ける。数秒して、ついに一番上へとたどり着いた。「車まで走るぞ。まず、この場から離れる」

「承知！」

カリクとレインは、一旦散に車へと走り出した。キッチン、食堂と通り過ぎ、廊下へ出る。足を止めずに、さらに駆けていく。玄関にたどり着いた二人は、外に出ると、すぐさま車に乗り込んだ。

「カリク、あいつは来てるか？」

運転席に滑り込んだレインに問われ、カリクは助手席へつく前に廃屋の入り口を見た。

「いや、まだ来ない。とにかく、さっさと行くぞ」

誰の姿も見えなかつた。席に腰を下ろし、レインを促す。

「あいあいさー！」

それを受け、彼は元気よく返事するとエンジンをかけた。アクセルを踏み込む。カリクは万一一にそなえ、後部座席から廃屋の入り口方向へ銃を構えた。徐々に離れ出す。

しかし結局、再び男を見たりはしなかつた。

「巻いたか……」

肩から力を抜く。一旦は脅威から逃げ切つたと考えてよさそうだつた。後部座席から、助手席へと戻り落ち着く。

「いやー、危なかつた、危なかつた。さすかにびびつたぜ」

ハンドルを握るレインが、ほつとした表情を浮かべた。カリクは、厳しい目線を向ける。

「お前、何者だ？ 本当ならどうでもいいところだが、サリアが攫われた理由と関係があるなら、話が変わるぞ」

珍しく、レインは黙り込んだ。口元は笑つたままでいるのだが、明らかに様子がこれまでと違う。

「答える、レイン。お前は何者だ？」

さらに追及すると、彼は一度息を吐いてから、

「何者ってわけでもない。ただの、被実験対象者だったってだけだよ」

嫌々といった感じに、口を開いた。

二人の少年が去つた、謎の地下施設。男はまだそこにいた。

「逃げられたな。たいした奴らだ。ガキだが、元気な分、対応しづらいもんだ」

男は一人でつぶやいていた。暗闇に、声が吸い込まれていく。

「しかしまあ、こんなところまで來ることを考えると、そのうち

に会つ機会があるかもしれないな

一田言葉を区切り、この場所を出るために男は“それ”へ呼びかける。

「行こうか、父さん」

闇の中で、何かが蠢いていた。

六章『施設』

「実験？」

夜を走る車中、カリクはレインの発言に眉を寄せた。

「そうだよ。あの施設は、首都に本部がある、“ジーニアス”つてところだ。聞いたことないだろ？」

「ないな。そのジー二アスとやらは、なんの研究をしてるんだ？」

「“オモイノチカラ”」

「はっ？」

彼から放たれた単語は、意外なものだった。

「カリク君の彼女が持つてるつていうやつさ。その研究をしているんだ」

いつもの朗らかさはまったく見えない。いつの間にか、笑みも消えていた。

「研究つて……。何をどうするつていうんだ？　あんな力を持つ人間なんて、一握りもないだろ！」

「ああ、数はまったくない。ただ、“力”的持ち主はいる。カリク君の彼女とは、かなり性質が違うものっぽいけど」

カリクの指摘に理解を示しつつ、力の持ち主がいることを言及していく。誰のことなのか、察しがつかなかつた。

「“力”的持ち主って、誰のことだ？」

知っている人間かどうかはともかくとして、まず尋ねる。そして、彼の挙げてきた名前は、

「“軍王”、ミッドハイムさ」

「ミッドハイム！？」

あまりにも有名で、にわかには信じられないものだった。

「奴が、“オモイノチカラ”持つてるつていうのか？　そんな馬鹿な。だったら、どうしてサリアを攫つたんだ。もう“力”はあるはずだろ」

「詳しい事情は、俺つちにも分からぬ。ただ、ジーニアスを設立したのはミッドハイムだし、秘密裏に諸々の調査を行わせてゐるつて話もある。なんかの事情で、『オモイノチカラ』にご執心なのは間違いないと思うぜ」

話しつつ、レインが車の速度を落とす。一応の脅威からは逃れたという判断らしい。

「理由は分からぬが、とにかく『力』を求めてるつてことか。奴自身の『力』はどんなものなんだ。サリアとは、違うんだろ」

「ああ。人の心に声を届けるわけじゃない。ちらりと聞いた話じや、こっちの考えを読み取つてくれるらしいぜ」

「考え方を読み取る？」

サリアという普通ではない例を何年も目の当たりにしてきたのも関わらず、カリクの口からは訝しむような声が出た。

「そうらしい。あくまで、研究者たちとか、たまにくる軍人たちの立ち話を盗み聞きしてただけだから、正確さはないけど、話しぶりはマジっぽかつたぜ」

「マジっぽかつた、か」

理解はしたし、おおいにありえることであるのは分かつているのだが、素直には受け入れられなかつた。ただ、仮にミッドハイムが本当に『オモイノチカラ』を持つのなら、力の存在を知つていた理由は簡単になる。自身が宿していたからだ。

「それで、お前はどんな実験に利用されたんだ？」

「あー、なんかよく分かんない実験さ。『後天的にオモイノチカラは発現できるか』とかいうやつだつた」「力の発現か。ずいぶんとまた、ありがちなこつた」

カリクは肩をすくめた。続けて問いかける。

「実験の内容は？」

「やつしたこと自体は簡単なもんさ。軍王の血を、注射したんだよ。要するに、血を被験者の体内に入れたわけ」

レインの口振りだと、たいしておかしくないことかのようだつた

が、とんでもないことだつた。

「そりやまた、お手軽でイカレた実験だな。それで、お前に“力”はついたのか？」

行為の愚かさに、カリクは訝しげにまぶたを半分ほど閉じる。レインは、ニヤリとした。

「ああ。ついたぜ。いろんな人の心の声が聞こえるようになった」「嘘つけ」

「あははは。まあ、分かるよな。カリク君の思つてるとおり、複数いた被験者の誰にも、力は発現しなかつたよ」

カリクがツツ「コむと、あつさり本当のこと口にした。ふんと、鼻を鳴らす。

「だらうな。そんなお手軽に、“力”が手に入つたら、今頃そこらにゴロゴロしてるだらうよ」

それから、考えがサリアのことに及んだ。

「待てよ。じゃあ、サリアもその研究とやらに利用されるのか？」

「さあね。俺つちも、そこまでは分からぬ。一ヶ月前には、施設をもう逃げ出してたし。まあ、何かしらへ利用しようとしてるんだうつけど」

レインの言葉に、カリクは押し黙つた。イカレた人間たちによる実験に巻き込まれるかもしれないというのは、不安要素としては大きすぎる。サリアが貴重な人材であることから、無理な扱われ方はしないだろうという予測があつても、拭い切れない。

「そういうば、あの施設はどうする？ 資料とかは、もうどうせ回収されてるだらうけど、俺つちの話よりも詳しく、あの施設がどんなものかくらいは見られると思つぜ。明日になつても、まだあの軍人がいるかもだけど」

カリクがしゃべらなかつたからか、レインから話を振つてきた。

しかし、カリクは首を左右へ動かす。

「少しくらい、何か掴めればと思つてたが、時間が惜しい。このまま行つて、どこかで休んでから、首都に向かおう。ただ、首都への

道に乗つかるのは、明日の朝になつてからだ。あの男も車で移動してて、俺たちが休んでるところを襲われたらどうしようもない

「あー、それもそうだな。じゃあ、町から出る位置を、首都方面とは別のところにするか」

カリクの提案に従い、レインは車の向かう先を変えた。

しばらく走り、二人は町の外へ出た。ただし、首都とは別方面である。

「ここらでいいかな？」

「たぶんな。でも、交代で見張りをつけるくらい、やり過ぎな警戒をしてもいいかもしない」

誰が映るでもないバックミラーを覗き込みながら、カリクはレインへの回答と提案をした。敵が未知数であるため、油断ができない。「そうかー？　さすがに気にしそぎじゃねーか？　後から足音が聞こえたのが研究者なら話は別だけど、あれも軍人なら、たぶん他の任務中だから、そっちを優先すると思うぜ」

「確かに。お前の言うとおりだ。だが、奴らを“普通”的に入れて、予測を立てるのは、個人的な見解としていい気がしない」

「気にしすぎではというのは、カリク本人も思つている。しかし、一番大事なのがサリアを助ける前に死なないことである以上、考え過ぎな行動を選ぶのが安全策だった。

「ふーん。別にいいけどさ。でも、あんまり気を張りすぎると、いざつてときに疲れが出ちまつぜ。少しは、肩の力を抜いてみたらどうだ？」

「抜けたらな。とりあえず、今日はもう休む。先にお前から寝ろ」

レインの話を受け流し、休息を促す。

「あれ、俺たちからでいいのか？」

「運転手が疲労で事故なんて、ごめんだからな。しっかり休んどけ。こつちが困る。それに俺はハンドルを握らないんだ。最悪、お前が運転してるときに休む」

「ああ、そつか。でも、途中で交代はするんだろう？」

「そのつもりだ。さすがに、夜通しは厳しい」

レインの問いを肯定し、カリクは銃を取り出した。

「……何すんの？」

「点検するだけだ。お前を撃とうってわけじゃないから、安心して寝てろ。明日も、また運転してもらわないといけないんだからな」「へいへい」

休息するより口を酸っぱくすると、レインは微笑した。座席を倒し、皿を閉じる。

「じゃあ、お言葉に甘えて、先に休ませてもらいますぜ。おやすみ」「ああ、おやすみ」

賑やかなレインの声が消え、カリクは静寂に包まれた。辺りの闇をときたま見ながら、銃の簡単なチェックを進めていく。（本当は、解体してメンテナンスもしたいけど、さすがに敵を警戒しているときにそれはないか）

一人、頭を回す。知らず知らず、思考はサリアのことに移つていった。

（今頃、何してるんだろう。おかしなことをされていないといいんだが）

途端に、気持ちが焦り出す。早く助けないとという感情が沸き上がってきた。ただ、頭は冷静なため、なんとか焦りを打ち消して落ち着こうと、自分と戦いだす。

（ダメだ。ここから首都までは、まだ距離がある。すぐさま助けには行けない。落ち着け）

深呼吸し、なんとか気持ちを抑えて現実に自分を戻す。

（だいたい、なんで奴らはサリアを攫つたんだ。本当に研究のためだけなのか）

そのうちに、根本的な疑問へ考えが及んだ。なぜ、今のかも気にかかつた。

（ミッドハイムが軍王になつてから、五年は経つてる。タイミング的な問題なのか、それとも何か別の理由が……？）

しばらく考え込んだが、答えは出せつになかった。また、サリアの身を案じ始める。

「サリア……」

思わず、少女の名を零した。心の内が、また荒れ出す。

「ずいぶんと寂しそうだな、カリク君」

すると、右側から少年の声が挿まってきた。当然ながら、レインである。寝る体勢になつてから、たほど時間は経つていないので、起きてもなんら不思議はない。油断していた自分に、カリクは軽く舌打ちした。

「ずいぶん、可愛いところがあるじゃないの」

「つるせえ。悪かつたな、女々しくて」

「誰も女々しいなんて言つてないだろ。いいじゃんか。そういう風に、心から心配できる人間がいて」

からかい口調のレインだが、それでいてビシカ真剣さを感じさせるものがあった。疑惑をそのまま言葉にする。

「お前にはいないのか。そういう人間は」

「……俺つちには、いない。孤児だからな。物心ついた時には、もう施設の中だつたし」

常は軽薄な態度の少年だが、今は少し寂しげだった。何かを隠してこるようを感じる。

「そうかよ」

しかし、踏み込んで尋ねよつとは思わなかつた。一言で、話題を切る。

「なあ、そのサリアちゃんて、どんな子なんだ？　ちゃんと聞いたことがなかつたから、気になるぜ」

話自体は終わらず、レインが別のことを持げる。カリクは、軽くため息をついた。

「俺、寝ろつて言つてるよな」

「分かってるけど、気になつて眠れないんだよ。カリク君がサリアちゃんがどんな子か教えてくれたら、すつきり眠れると思うぜ」

声に棘を含ませたが、利き耳はなく、額を押された。

「なー、いいだろー」

まったく嬉しくない猫なで声を聞き、銃を構えるかどうか迷つたものの、今はメンテナンス中であることを思い出し、その選択肢は捨てた。仕方なく、折れる。

「……分かったよ。でも、聞いたらすぐに寝ろよ」

「了解、了解！」

レインは清々しさすら感じじる笑みを浮かべた。どうにも子供っぽい。

「はあ……。なんでお前にこんなことを話さないといいんだか」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。焼きが回ったってことで」

「それは、お前が言うセリフじゃないだろ」

もう一度額に手を当てて、ため息をついてから、ぽつりぽつりと

カリクは話し始めた。

「あいつとは、サリアとは物心着く前からずっと一緒にいた。正確には生まれたときからじやないらしいが、ぼくは同じようなものだろう

「幼なじみってわけか」

「そういうことだな」

「でも、ただの幼なじみじゃないんだよな、もひろさん」

意地悪い笑みとともに、レインが耳を輝かせる。

「好きに言つてろ。わざわざ俺から話すことじやない」

カリクは突っぱねるような態度をとつたが、答えをほぐらかせてはいけない。むしろ、明確に示してしまつてはいるとも言えた。

「ふーん。そつかそつか。じゃあ勝手に解釈させてもらひます、カリ

「ク君

「ふん」

調子づくレインに対してできたのは、鼻を鳴らすくらいだった。

「で、その幼なじみってどんな子なんだ?」

「そうだな……。ひたすらに穏やかで、優しい。素直だし、純粋で

もある。俺と真逆だな。空気が柔らかいんだ、あいつは

何もかもを包んでしまえそうな雰囲気を醸し出す少女の姿が、頭に浮かんだ。そして、彼女の特徴はもつと深くにある。

「けど、それだけじゃない。サリアは、どれだけ邪険に扱われても、誰かを悪く言つたりしなかつた。絶対に恨み言を持っていたはずなのに、俺にも言わなかつた。誰も恨まないつて、決めてるから。あいつは、強かつた。きっと、今でも強い。俺なんかより、ずっとな

それは、“強さ”だった。特別、何かの訓練を受けたわけではない。生まれつきの能力はあるが、それとはまったく関係のない意志の強さ。

「なるほどなあ～。カリク君がどれだけその子を大切に思つてるか、よく分かるぜ」

聞き手である少年は、どこに納得がいったのか、首を縦に何度も下ろした。

「何を基準に言つてるんだ、お前は」
理由を問いただしてみると、彼はいつも楽しそうに声を弾ませた。

「おっ、やつぱり無自覚か。簡単なことだよ。カリク君、俺つちの“どんな子か”って質問に、性格的なことしか答えてないじゃん」「納得せざるをえないその理由に、カリクは返す言葉を見失つた。
「俺つちは、外見のことも含めて訊いたのに、そつちはさつぱりだぜ。長いこと一緒にいると、そうなるもんなのか？」

続けての問いかけにも、明確な答えは出せやうになかつた。なんとか、

「知らねえよ。比べる対象もないし」

そんな言葉を口にした。

「ずっとサリアちゃん一筋つてか。言つてくれるね

レインが大袈裟に両手を開く。カリクは片手を顔に当て、息を吐いた。

「……やつぱり、お前には話さなけりやよかつた

「後悔先に立たずだぜ」

「お前が言うな」

レインのおでこを軽く叩くと、いい音がした。「あいたつ」と声を上げ、少し頬を膨らませながら、さすり出す。

「もういいだろ。話は終わりだ。早く寝る」

「へいへい」

不満げに口を尖らせていたが、外見のことをしてついく尋ねてきたりはせず、彼はまた寝る体勢になつた。

「つたぐ」

ようやく解放され、カリクは肩の力を抜いた。銃の調整を再開する。

黙々と作業を進めていき、数分後には終わった。ホルスターへ武器を戻し、一息つく。隣では、早くもレインが寝息を立てていた。振る舞いは元気だったものの、やはり疲れていたらしい。

「当たり前か」

長時間の運転に、廃屋でのやりとりである。疲弊しない方がおかしかった。

(俺も、なんだかんだ疲れてるしな)

ずっと気を張つたままである自分の疲れを認識する。確かに、レインに言われたとおり、このままではいやだとこづきに動けないかもしねえ。

(まあ、いいか。首都までの道はゆっくりさせてもいいわ)

そしてカリクは、朝まで見張りをすべく、車を降り、すぐ横でイメージトレーニングを始めた。座ついたら、眠つてしまふと思つたのである。

「レイン、起きろ」

翌朝、早い時間にカリクはレインを起^いこしたかった。「んあー

などとうなりながらも、ゆっくりとまぶたが開いていく。

「なんだ、交代かー？」

目をこすりながら、彼は身体を起こした。かなりぼんやりとしていたが、

「つて、もう朝じゃん！？　びひこひ」とー・ 起こしても起きなかつたの、俺つちー？」

朝日の光が既に降り注いでいる光景を窓の外にみとめ、急速にギアが入った。黒目が大きく見開かれる。

「起こさなかつただけだ。それより、燃料を補給するのを忘れていた。この町に補給場所があるかどうかは分からないうが、早朝のうちに探しに行くぞ」

そちらははどうでもいいと言わんばかりにそりと彼の問いに答えると、カリクは話題を変えた。

「お、おう。それは分かつたけど、お前寝なくて平氣なのか

「お前が運転してゐる隣で眠らせてもらつた。早く行くぞ」

レインの発言はほとんど話半分くらこにしか聞かず、わつわと返す。

「そりか？ ならいいけどぞ」

押し切られる形で、寝起きですぐに覚醒させられた彼は、エンジンをかけた。車が振動を始める。

「ていうか、供給場所があるとして、どこにあるんだ。どこ田指して走らせればいいの、俺つちー？」

「中心よりは外周だな。ちょっとした補給なら、そこに建てた方が効率的だ。町の出入り口を徹底的に当たるべきだろうよ。万一本くても、次の町まで持つか？」

「ん、それは大丈夫だと思つぜ。この町、狭いし

ハンドルを握るレインは軽く返し、アクセルを踏んだ。

「じゃ、いつちよ探しに行きますか」

二人を乗せた車が、また走り出す。

「いやー。そこまで厄介なことにならなくてよかつたな、カリク」「そこは同意してやる。下手な抵抗もされなかつたから助かつただな。金払つたし」

「通報はされるかもしないけどな」

カリクとレインが乗る車は、燃料を満タンにして、再び首都へと向かう道を進み出していた。

補給場所には一人が駐在していたのだが、カリクが銃を突きつけ、その間にレインが燃料を拝借した。脅しをかけているのに、代金は払つていつたのだから、ずいぶんと奇つ怪に思われただろう。

「こつから首都まで、あとどれくらいだ？」

「あと一日かかるか、かかるないか、かな。順調に行けば、明日の昼には絶対着くぜ」

不思議な事件を起こして町を出たところで、カリクは首都までの時間を確認する。レインはこともなげに答えた。

「それも、施設にいたから分かるのか？」

「ちょっとした疑問をぶつけた。

「ん、まあね。実験が主だったけど、軍人としての教育もしてたら、あそこは、武術も学問も、けつこう叩き込まれたぜ」

「養成学校みたいなもんか」

「いや、もつとキツいとこだな。本当なら違法な訓練もたくさんあつたし。卒業したら、裏部隊ルートが大半だし」

どうやら、俗に言う暗部の人員を育てる場所ならしい。

「裏部隊、か。じゃあ、サリアを攫つた連中もその類いの奴らなのか？」

大事な少女を連れ去つた一人組を思い出す。

「かもな。でも、微妙なとこだと思うぜ。本当にそいつらが暗部連中なら、カリク君を殺してるだろ？ し、なによりカリク君から聞いたような時間には行動しないと思うぜ」

内部をいくらか知つてゐるレインの言葉には説得力があった。加えて、カリク自身も、キュークで会つた男女二人が暗部系の人間という考えにしつくりきていた。

「ただ、昨日会つた奴は、間違いなく施設上がりの奴だ。醸し出す空氣で分かる」

「あいつか。結局、奴に関しては何も分からなかつたな」

昨日に接触した軍人のことへ、話題が移る。こちらは、何も知らないカリクすら、暗部の人間としか思えなかつた。纏つていた雰囲気が、あまりに危険だつたのである。

「まあ、個人の情報はさっぱりだけど、用事自体は情報を消しに来たつてところだろう。秘密の施設の後処理なんて、いかにも裏の仕事だろ」

レインがもつともらしい意見を上げたが、カリクは首をひねつた。それを見て、レインが尋ねてくる。

「何か、おかしいか？」

「いや、お前の意見は可能性として充分にあり得るんだが、あの建物は放棄されて久しそうな様子だつただろ。今更、残つてる資料なんであつたのか」

「あー、そつか。でも、全部を回収、処分できなかつただけで、残してあつた資料に用があつたとか、そんなんだつたのかもしれないぜ」

どちらの考え方もありえそうだつた。確定するには情報不足で、これ以上突き詰めるのは無理だと判断し、「分からないな」とカリクは首を振る。

「なんにせよ、あの施設が“オモイノチカラ”の研究をしていたなら、あの軍人も力に関わっているのかもしれない。また会うことになるかもな」

「そりや、『めんこい』むりたいねー」

続けて口にしたことに、レインはあからさまに顔をしかめた。いつも軽い態度の彼ですが、冗談抜きで昨日の男とは関わりたくない

いらっしゃい。

「同意見だ」

カリクも、できれば一度と遭遇したくない相手だった。具体的な理由云々というよりは、直感的に危険を感じたからである。「にしても、”オモイノチカラ”つてのは、なんのかね。特に害がある力ってわけでもなさそうだし。研究して、どうするつもりなんだか」

この疑問に、カリクは口を開かなかつた。一番根本的なものであるのに、最も解答が見えないので、予測すらままならない。（そうだ。どうしてサリアを誘拐したのかの前に、“力”的研究をしてどうするのかが問題なんだ。稀有なものなのは確かでも、軍のトップへ何か恩恵をもたらすとは思えない）

首都に、施設に行けば、分かるのだろうか。カリクは、眼前に伸びる道を睨んだ。首都はまだ見えるわけもなく、道と原っぱの中を進むばかりだつた。

それでも、一人を乗せた車は、着々と目的の場所へと近づいていた。

七章『それぞれの想い』

多くの軍人が、平時に勤務する本部基地。その中に、陸軍第一一部隊という表記のプレートが掲げられた場所があった。辺りには、他部隊の表記も見受けられる。各部隊に与えられているデスクスペースだつた。一人に一台、デスクは振り当てられている。そして、「つたく。軍人っていうのは、もっと現場重視の仕事場だと思つてたぜ」

自分のところで、溜めた書類と戦つているガヌ＝ロードの姿があつた。紙の山は、デスクの一角を完全に占拠している。サリアの誘拐は特別任務であり、裏部隊の所属ではないのだ。

「溜めるお前が悪いのだろう。その場その場で処理していれば、そんな量にはならん」

文句を口にすると、背後から反応があつた。振り向くことなく、言葉を返す。

「うつせー。俺はお前ほど、要領よくも真面目でもないんだよ」「貴様のその言い訳は聞き飽きた。別の言い回しでも考えたらどうだ」

「あー、また今度な。それより、これ手伝ってくれませんか、シリラ様。なんか奢るから」

身体を捻つて、会話相手を見る。その相手は、金髪のポニー・テールの女性軍人、シルラ＝マルノルフである。彼女はガヌと別の部隊だが、デスクの位置は謀つたかのように、すぐ後ろだつた。

「お前の仕事だらう。お前でなんとかしろ。それに、私もこれから仕事だ」

彼女は、壁にかけてある時計に目をやつた。示している時間は、午後六時半。ガヌは、それだけで何かを察する。

「ああ、そうか。そつちがあるのか」

口には出さなかつたが、サリアの見張りのことである。

「仕方ないな。じゃあ、明日まだうだ？」

「自分でやれ！」

頼る気をなくすに、提案してみたものの一喝された。そのまま彼女は背を向け、歩き出す。

「つれないねー」

ガヌは一人で肩をすくめた。姿勢を直し、再び書類の山と対峙する。

「頑張つてやりますか」

と、やる気を出そうとしたところで、

「ガヌ中尉」

低く重たい男の声が降つてきた。ため息をついてから、顔を左上に向ける。

「なんの用だ。わざわざ、『普通』の部署まで顔出すなんて

「いえ、少し報告したいことがありますね」

がつちりとした体躯で、岩を思わせるような男が、濃い顔に含わない微笑を浮かべる。階級は准尉だが、彼の属する裏の部隊では、位などあつてないようなものだった。

名前は、ノーザン＝ジャッジといった。

「で、報告つてなんだ。さつき見たとおり、俺は忙しいんだが」「その通りですね。まあ、僕もあいつみたいにいものは嫌いですが、あそこまで溜まつたことはないので、どの程度かは想像の域を出ませんが」

ノーザンは遠回しに皮肉を言つてきた。多少かんに障つたものの、時間が惜しいので流す。

「分かつてゐなら、そつと済ませしてくれ

「了解しました」

屈強な男は、意地の悪そうな笑みを浮かべた。理由もなく、悪寒

を覚える。早く、この場から立ち去つてしまひたかった。

「では、『注文のとおり手短に済ませましょ。単刀直入に言いますと、レインに遭遇しました』

しかし、会話に出てきた名前を耳にして、その氣は失せた。一度、目を大きく開いてから、軽く首を振つて問う。

「どこでだ」

「シャズの町です。そこで任務中に出くわしました」「シャズだと？」

ガヌは、顔をしかめた。シャズの町は、特に何もない小さな町のはずだ。とても裏部隊の人間が、任務で赴く場所に思えなかつた。あつてせいぜい、殺さなければならぬ人間が隠れ住んでいるとか、そのくらいである。

「ええ。あなただからお話ししますが、あそこには“ジーニアス”的施設があつたんです。今はもう稼働していませんが、その資料処分を任せられたので、足を運んだんです。そうしたら、彼と遭遇しました」

本来なら秘匿すべき情報を、ノーザンはためらいなく話す。理由は察しがついた。

(俺の反応を見たいんだろうな)

短い付き合いではあつたが、目の前の男は自分の楽しみを優先させるタチであるのを、ガヌは把握していた。その上で、また尋ねる。「それで、レインをどうしたんだ」

声には敵意がこもつていた。向こうが面白がるだらうとは思ったが、隠すことができなかつたのである。

「どうもしてませんよ。殺そうとしたが、取り逃がしてしまいましたからね」

逃がしたという単語に、ガヌは一寸肩の力を抜いた。同時に疑問も抱く。

「取り逃がした、か。いくらジーニアスにいたとはいえ、お前が高校生そちらの歳の奴を逃すとは思えないんだが」

「ええ、まあ。自分で言つのも変ですが、レイン一人なら、始末で
きていたと思います」

「一人なら？ 誰か他にいたのか」

「心当たりがなかった。

「ええ。 同い歳くらいの少年が一緒にでした。 何者か分かりませんで
したが、僕に対して冷静な態度だった上に、銃を所持していて腕も
よかつたですから、ただ者ではないかと」

「銃の腕がいい、か」

「誰か心当たりでも？」

「いや、ないな」

ノーザンの話を聞き、ガヌの脳裏にはキューールで出会った少年が
浮かんだ。しかし、レインと一緒に行動するような経緯が想像でき
ず、その考えを打ち消す。

「とにかく、その少年とレインの一人を取り逃がしました。 ですが、
おそらくあの二人は“ジーニアス”に何かしらのアクションを起こ
そうとしている。遠からず、首都にも来ると思いますよ」

「“ジーニアス”にねえ。一度逃げてきた奴が、そうのここの戻っ
て来るもんか？」

抱いた疑問を口にする。ノーザンはせせら笑つた。

「戻つて来ますとも。 現に奴は、元とはいえ“ジーニアス”的施設
に来た。 それも、何かの目的を持つているのだろう少年と。 大きな
流れに、人は抗えやしない。 もう、すべてが流れ出しているんですね
よ、ガヌ中尉」

意味深だった。 意図は読めないが、気味の悪さだけは十二分に伝
わる。

「それに、あなたの場合は首都に“来てほしくない”んでしょう？」
続けてされた指摘に、ガヌは息をのんだ。 何も言つまでもなく、
その反応が答えになってしまっていた。

「では、僕は失礼します。 面白い反応も見れましたしね。 それでは」

満足そうな様子で、ノーザンは歩き去っていった。一人、ガヌは取り残される。

「レイン、戻つて来ないでくれよ……」

独り言は、廊下へ吸い込まれていった。

同刻、地下にシルラの姿はあった。サリアの捕らえられている部屋の前にたどり着き、外の見張りをしている男の部下へ声をかける。

「お疲れ様」

「ああ、シルラ中尉。お疲れ様です」

「あの子の様子は？」

「さあ……。自分は、中の様子を見ていないので、なんとも」

「分かつた」

うなずき、部屋への扉を叩く。

「私だ。シルラだ」

しばらくして、中から女性の部下の顔が覗いた。

「お疲れ様です、シルラ中尉」

「お疲れ様。交代の時間だ。帰るといい

「はい。ありがとうございます」

彼女は礼儀正しく頭を下げる

「それでは、お先に失礼します」

地下室から離れていった。入れ替わりに、シルラは部屋に入る。

「サリア」

後ろ手で扉を閉めると、中にいる少女へ声をかけた。ベッドの上で、横になつている。返事がない。眠つているようだつた。音を立てないように、忍び足でそばへ行く。可愛らしい寝息を立てていた。思わず、頬を緩める。

「カリク……」

しかし、次に彼女が発した寝言に、シルラは固まつた。目の前の

少女は、それほどなんともないよう見えていたが、不安を抱えていて当然なのだ。

（私は……）

軍人は、上の命令を聞かなければならぬ。士官学校では、そう教わった。シルラは絶対に守らうといふほど正しさを信じていたわけではないが、今は守ることが正しいとは考えられなかつた。

（私は、どうすれば）

表立つて動く気はなかつたのに、心は揺れ出していた。

任務を受けたのは、一ヶ月ほど前だつた。仕事中に、いきなり呼び出されたのである。初めて軍王の座する執務室へ行くことになり、扉を叩くことにも酷く緊張した。

「シルラ＝マルノルフ中尉です」

「どうぞ、入りなさい」

「失礼します！」

返事が上擦つたのだが、恥ずかしがる余裕すら持てず、とにかく中へ入つた。するとそこには、

「あれ、シルラも、ですか」

ガヌの姿があつたのである。

「な、なぜ貴様もここに」

「呼び出されたからに決まつてるだろ」

驚いていると、肩をすくめられた。彼の言い方にむつとすると同時に、安心感も覚えていた。

「ええ。私が呼んだのです」

軍王、クラカル＝エル＝ミッドハイムの声が挟まつた。シルラは慌てて彼の机の前へいき、ガヌの隣に並んだ。

「あなた方は、我が軍の中でも、特に優秀な若手と聞いています。

そこで私は、今回あなた方に特別な任務を言い渡そうと思つたので

す

「特別な任務、ですか」

ガヌは気のない反応だった。彼は、どんなときでも彼だったのである。

「ええ、そうです。なので、あまり乗り気ではないにしてもやっていただきますよ」

ミッドハイムがにこやか微笑んだ。すると、ガヌはわずかに眉をひそめた。シルラも、田の前にいる軍のトップに、恐怖感を抱いた。「あなた方に頼むのは、ある少女の誘拐と、監視です。それ以外は何もありません。簡単な仕事でしょう」

「誘拐……」

汚い仕事が多く存在している中で、なおかつ軍王からの直々の依頼だとそういう系統の仕事の可能性が高いと知っていたものの、それでもシルラは、提示された任務の内容を疑つた。犯罪が任務というのは、納得がいかなかつたのである。

「ええ、そうです。そこにいる、ノーザン・ジャッジ准尉とあたつてもらいます」

「えつ？」

軍王から見て、二人の右奥に彼の目線がいったところで、シルラは間抜けな声を出してしまつた。振り返ると、それまで気づかなかつた、がたいのいい男が壁に体重を預けて立つていた。言われるまでもなく気づかなかつた。

「彼はあなた方の噂にある、裏の部隊の者ですが、今回の任務を行つてもらうことになります。ただ、メインはあなた方にお任せするので、そのつもりで。まあ、仲良くするといいでしょ」

ミッドハイムが説明する間に、ノーザンは一人の方へと近づいてきた。ゆっくりと重々しく口を開く。

「ノーザン＝ジャッジ准尉です。よろしくお願いします」

気味悪い微笑と共に、ノーザンは自己紹介してきた。どうにも、仲良くなれできそうになかった。

「ああ、よろしく

それでも、あいさつはなんてことのないように戻した。隣のガヌは、

「んー、そこまで仲良くはしたくねーな」と、正直な感想を口にしたが。

「どうやら、彼に対しても二人共あまり友好的ではないようですね。まあ、仕事はしっかりこなしてください」

やりとりを黙つて見ていたミッドハイムが口を出し、会話をまとめた。これはまだ、観察だけで分かる範囲ではあるが、シルラは内心を見透かされているような気がしていた。頭に浮かんだのは、ミッドハイムに関するとある噂。

「ミッドハイム総督。なんか、俺らの考へてること、見透かしてません? なんでも噂じや、人の考へてることが読み取れるとか聞きますが、それが本当だつたりするんじやないですか」

それをガヌは、ためらうことなく真正面からぶつけた。ミッドハイム軍王は人の心を読める、という話がかなり前から存在していたのである。

「ええ、本当のことですよ。私は、他人の心を読むことができます。心理学などの類いではなく、もつと直接的に」

問われた彼は、隠す様子もなくあつさりと認めた。あまりに軽すぎて、シルラは信じられなかつた。ガヌも同じ考えだつたようで、「にわかには信じがたいですね。手品の範疇とかなんじやないんですか」

訝しげな表情を、軍王へ向けた。

「そう簡単に信じなくとも、別にかまいませんよ。そこは大事じやありませんから。とにもかくにも、あなた方はこれから話す任務をこなしてくださいれば、それで充分ですかね」

彼は回答をはぐらかし、任務についての話を始めた。誘拐の対象が、特別な力を持った少女だと聞かされたところで、シルラは問い合わせを挟んだ。

「その子を攫うことに、どんな意味があるのですか」

「我が軍のため、とだけ言っておきましょう。彼女の力が、我々の利益になるのです」

「力?」

「ええ。私の力と通じるものですが、彼女は自分の意思を、言葉を使つことなく直接我々の心へ伝えることができます。俗に言つて、テレパシーのようなものです。かつての記録で、我々の持つ力へつけられた名前は、“オモイノチカラ”。彼女はそれを有しているのですよ」

これもまた、到底信じられない話だった。テレパシーのようなものと言わても、それはあくまで虚構の世界にあるものなのだ。例にされたところで、納得がいくはずもなかつた。

「疑うのも無理はありませんが、とにかくこれは命令です。どれだけの疑問を抱こうとも、従つてもらいますよ」

口調は柔らかなままだつたが、有無を言わせぬ威圧感が入り混じつていた。雰囲気に呑まれ、シルラは何も言えなくなつた。

「……それくらい分かってますよ。ただ、やり方はこっちに任せてもらつていいですかね」

代わりに、ガヌが不機嫌な声色でしゃべる。彼も、疑問を持つているようだつた。

「ええ、かまいません。サリア＝ミュルフを私の前に連れてきてくれさえすれば、あとは何をしようと自由です。私へ反抗することも止めません。その結果どうなるかは、何も約束できませんがね」

ミッドハイムの返答は、脅しだつた。シルラにはガヌが何を思つて、やり方は自分たちの好きにさせるよう求めたのか分からなかつたが、滅多にシリアルスさを出さない彼が、引きついた表情を見せた。「とにかく、しっかりと任務をこなしてください。これは、最重要の任務と言つても過言ではありませんので。詳細はまた後日としますから、今日のところはもう退室していただいて結構ですよ」

部下の反応には気づいているに違ひなかつたが、触れることなく、

ミッドハイムは退室を命じた。

「……失礼します」

子供のように、ガヌは露骨に機嫌を損ねていた。足早に扉へ向かつていった。

「私も失礼します」

シルラも頭を下げて、逃げるように彼へ続いた。こうして、ガヌと執務室を後にしたわけである。ノーザンは、一緒ではなかつた。しばらく、無言で廊下を進んでいたのだが、途中でガヌが口を開いた。

「シルラ」

「なんだ」

「お前、あの任務をどう思つ」

訊いてきたのは、簡単なことだつた。キッと、睨みつけるような目線を送つた。

「あの内容で、私が楽しみにしていると思つなり、お前はたいした目利きだ。眼科に行つた方がいい」

強い口調で答えた。得体のしれない恐怖から解放され、いつもの調子を取り戻していたのである。

「お前なら、きっとそうだと思ったよ。なら、協力してくれないか、シルラ」

「協力？」

「ああ。任務は成功させる。ただ、『完璧』にはこなさない。とつかりを作る」

「とつかかりつて、どんなだ」

突拍子のない発案だつたが、否定はせずに話を聞いた。ガヌの目が、いつになく据わっていたというのもあつた。

「それはまだ分からないが、裏部隊の奴らだけじゃなく、俺たちをこの任務に当てた理由が必ずある。ということは、対象であるサリアつて子のことを調べたら、何かが見つかるかもしれない。そこが、とつかかりになるはずだ」

彼の言葉は、力がこもっていた。確かに可能性はなかつたが、シリラは迷わなかつた。

「なるほどな。実にお前らしい、不安な作戦だ」

「まず皮肉を放つてから、

「だが、そこでためらわないお前を評価して、協力してやるづ。会つたこともない少女だが、理不尽に巻き込まれるといつ時点では、助けることに疑問はいるまい」

彼への全面的な賛成を表明した。田を含わせてうなづく。「だが、軍王はどうする。もしも、奴の話が本当であるならば、次に会つたときにバレてしまつぞ」

「問題ないさ。じつちが田的を達成できるなんぞ、奴は思つてない。何を考えているのがバレても、釘を刺されるくらいで、本氣で止めにはかからないだろう。さつきも言つたが、わざわざ俺たちを選んだ理由があるんだからな」

シリラの持ち上げた問題点へ、彼は間髪入れずに解答を示した。

「ずいぶんと自信満々だが、何か確証があるのか

ただ、どう考慮しても不十分であつた。予測はついていたが、一応尋ねてみた。

「ない！ 全部推測だ」

案の定、はつきりと証拠はないと返され、思わず笑つてしまつた。

「ははは！ さすがだな。やはり、貴様は理解できん」

「んあ？ なんだよ、仕方ないだろ。分からぬものは分からぬんだ。でも、だからって全部を受け入れるわけにもいかねえ。可能性があるなら、そこに賭けるぜ、俺は」

笑われたことに対し、彼は口を尖らせた。なんとか笑いを抑えて、言葉を足す。

「すまん、すまん。別に、貴様を馬鹿にしているわけではないのだ。私だって何も妙案は思いついていないしな。ただ、あまりに貴様がいつもどおりに根拠のない自信を持っているものだから、おかしくてたまらんのだ。ふふ、あはははは！」

そのうちに、シルラは我慢できずにもう一度笑い出した。廊下を歩いている他の人間たちが目向けてきていたが、まったく気にならなかつた。

「なーにが、そんなにツボに入つたのかねえ」

ガヌは呆れたような声を出したが、彼も口元が弛んでいた。

「私も分からん。とにかく、おかしいのだ。なんにせよ、私たちでなんとかするぞ、ガヌ」

「笑いながら言うかー、そういうこと？　まあ、同意するけどな」こうして、二人は攫う対象たる少女を救うために、動き出したのであつた。見通しは暗かつたが、ガヌがいるなら、シルラには希望が途絶えることはないよう思えた。

事実、彼らの行為は無駄にならなかつた。少女のすぐ近くに、軍の語り草となつてゐるトルマ＝シェードと、その息子でありエリート街道を歩む実力者のニック＝シェードの姿があることが分かつた。ガヌの見立てだと、ミッドハイムは裏部隊の人間を派遣した場合に、捕らえられたときの情報流失を恐れていますのではないかということだつた。

そこで二人は、ニック＝シェードとの連携を考え出した。しかし、その矢先に彼は首都から弾き出されてしまつた。軍王から一人への牽制なのか、それとも元々遠ざける予定だつたのか定かではなかつたが、助力者になりうる人間が、首都から一人いなくなつてしまつたのである。

だが、二人はあきらめなかつた。まだトルマ＝シェードの存在があつたし、首都から離されたことで、シェード親子が陰謀に気づく可能性は、十分にあつたからである。ただ、トルマが表に出てきたとしても、二人には、任務をしくじるわけにはいかないという共通認識があつた。任務に失敗して、自分たちが処分されるのは、避けたかつたのである。死んでは元も子もない。

なので、任務には支障をきたさない程度に、あらゆる部分で“きっかけ”を作るようになつた。同僚たちに任務内容をぼかして伝えて

みたり、サリアの誘拐を脳間に決行したり、行き帰りはわざと人目につく場所を通つたりと、誰かが自分たちの行為に気づき、アクションが起ることを期待したのだ。

（そう、“何か”を待つてゐる。ニック＝ショードでも、トルマ＝ショードでもいい。何か、動きが起きればと）

一人自身は、期待してゐる外部からの“何か”が起きるまでは、動かないと決めていた。先んじて動き、軍王に見咎められてしまつと、いざというときに動けないためである。

しかし、サリアのつぶやいた言葉に、シルラは揺れている。本当に、あるかどうかも確かではないきつかけを待つしかないのか、と。眠り続ける少女を見下ろす。答えは、もう心にあつた。

「ふん。どうせ、階級に興味はないしな。私が軍人になつた理由を、まつとうしないのでは、ここにいる意味がないだろ？」「

初志を思い起こし、決意を固めていく。

「“護りたいものを護る”。それだけのことだ」

待つだけをやめる。組織に属する身であるシルラにとつて、危険きわまりない行為だつた。それでも、譲れないものがある。

「貴女に、悲劇は似合わないしな。好きな人間のそばで笑えるように、精一杯努力しよう」

少女の髪を、優しく撫でた。まだ幼いとはいえ、彼女にはもう大切な存在がいる。シルラは、少女をそのそばへ返してあげたかつた。（ガヌには、伝えんといかんな。引き止められるかもしれないが、こは譲れん）

決心したところで、一緒に少女のことを考えてきた同輩のことがよぎる。心配してくるに違いないとは思つたが、彼が相手でも今の気持ちは曲げるわけにはいかなかつた。

シルラが少女のために動くことを決めた頃、ノーザン＝ジャッジは、軍王の座する執務室にやってきていた。

「それで、資料はまだ残つてましたか？ シャズの町にあつた施設は、規模こそ小さかつたですが、優秀な検体がいましたから、なかなか興味深いものも多く残つていたかと思いますが」

口火を切つたのは、ミッドハイムである。例によつて、顔には微笑を浮かべていた。

「優秀な検体ですか。はは。まあ、確かに“力”をすでに持つていましたからね。研究者たちも、かなり盛り上がつてましたよ」
ノーザンが声を上げて笑い、持ち帰つた資料をぞんざいにミッドハイムの机へ投げ置いた。かなり傷んでいたが、軍王は口角をさら上げる。

「素晴らしいですね。まだ、こんなにあつたとは」

上機嫌に、紙やファイルをいじり出した。動作自体は子供のようなのだが、可愛らしさはない。見た目などの問題ではなく、何からかの恐ろしさがあった。

「しかし、どうして今更、あそこの資料を？ 主要なものは首都に移したのでしょうか？」

それを肌で感じつつも、ためらうことなく、質問する。資料から目を離さずに、ミッドハイムは言葉を返してきた。

「ええ。私の求めていた“力”とは、また別物でしたから。ただ、サリア＝ミコルフを手中にした今、あらゆる面からの調べ直しが必要になるのですよ」

彼の求めている“力”については、ノーザンも詳しく知らなかつた。なので、最終的にどうしたいのかも分からぬ。

「へえ……。しかし、遠くからしか見ていませんが、あの少女がそんなに大事な存在だとは、信じられないんですけどね」

軍王が出した少女の名前に反応し、率直な感想を漏らす。

「否定はしません。彼女の価値が分からなければ、そう見えるでしょう。情報を持つていなければ、ダイヤも石ころと同じです。ただ、ダイヤに値するための力を、彼女が既に発現しているかどうかは、定かではありませんが」

それに対する相手の返しに、ノーザンは首を横に傾けた。

「発現？ ジーニアスの研究では、“オモイノチカラ”は先天的なもので、生まれた時点で、もう発現はしているとかいう話ではありますませんでしたか」

「普通ならその通りです。ですが、ただでさえ稀有である“オモイノチカラ”的力の持ち主の中でも、彼女はさらに特別な存在なのですよ。世界を変えられるかもしぬないほどに」

答えながら、軍王は自分のイスの背もたれへと体重をかけた。静かに目を閉じる。

「私は長い間、それを追いかけてきましたのです」

「貴方にそこまで言わせるとは、いつたいどんな力なのか余計に気になりますね。そろそろ聞かせていただけませんか」

國の頂点に立った男が、長きに渡つて求めてきたものに興味があつた。

「まだ、詳細を話す気にはなりませんね。時が来れば、おのずと分かるでしょ。貴方が察するか、私の口から明らかにされるかは、断定できませんが」

しかし、ミッドハイムは答えなかつた。どこに目線を合わせるでもないが、わずかにまぶたを持ち上げる。

「今日は、もう結構ですよ、ノーザン准尉。まだ懸案事項がいくつかありますから、明日からはそちらを任せることになるでしょう。レインが現れたというのを、私に報告してこなかつたのは、見逃してあげますので」

「……それは、どうも」

(本当に、かなわない人だ)

たぶん、これも読まれているだろうと思いながら、内心で冷や汗

をかいだ。

「あー、まあ、今日はこんなところでいいや」

報告書類の山を、全体の四分の一程度片付けたところで、ガヌはペンを置いて背伸びをした。周囲のデスクには、既に誰もいない。「さつてと、あいつはまだサリアちゃんの監視か。『ご苦労なこつて頭に、自分も行つてみようか』という選択肢が浮かんだが、首を振つて打ち消す。

「ダメだ。俺は、ダメなんだ」
自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「貴方の人生ならば、貴方の好きに生きればよいのではないですか」
そこに、柔らかな声が飛び込む。ガヌが扉の方へ顔を向けると、ミッドハイムが立っていた。

「……それは、何に対してもですかね」
「好きに解釈なさつて結構です。シルラ中尉のことでも、レインのことでも、その他のことでも」

「さいですか」

心が読めるのなら、言葉による駆け引きは意味をなさない。自然と手が汗ばむ。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ。私は、貴方に新しい任務を命じに来ただけですから」

そんな心内すら見透かし、ミッドハイムは穏やかに微笑む。

「新しい任務？」

「ええ。明日の朝一番に、ニケアのニック少将のところへ行つてください」

「ニケアへ？」

「はい。彼を、暗殺していただきたいのです」

「……なんですって？」

「ニック少将の暗殺です。嫌とは言わせませんよ。断れば、女性が一人亡くなることになりますから」

思い当たる人物は、たった一人だった。

「シルラが人質、ですか」

「さあ、どうでしょうね」

ミッドハイムはうそぶくだけだった。

「とにかく、任務を達成してください。大切な人を失いたくなれば」

勅命書をガヌのデスクに置き、彼はその場から去つていった。

「……困ったね、こりや」

ガヌは、一人勅命書を指で弾いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004x/>

オモイノチカラ

2011年11月30日20時57分発行